

**全国英語教育学会 第46回長野研究大会**  
**自由研究・事例報告 アブストラクト集 8月7日(土) 発表①～③**

8月7日(土)	1室		2室		3室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
①9:30-9:55	異文化理解・国際理解	海外に繋がる子ども達が参加する外国語授業における学習支援員の役割 松井かおり(朝日大学)	授業分析	Conflicting deictic gestures in EFL classrooms: Their frequency, mechanisms, and perception by learners 神谷信廣(群馬県立女子大学)	動機づけ	英語でのニュースを用いた大学の英語授業実践—学習動機に着目して— 今村梨沙(関西大学)
②10:05-10:30	異文化理解・国際理解	COILを用いた英語教育の可能性 早瀬沙織(中村学園大学)	授業分析	English First-Person Instructor Speech Outnumbers Mixed Speech Third Person Utterances 橋本弦汰(北海道教育大学大学院生), 片桐徳昭(北海道教育大学)	動機づけ	中学生英語学習者の動機づけプロフィールの探索的分析と検討 青山拓実(信州大学)
③10:40-11:05	異文化理解・国際理解	日豪間におけるオンライン学生交流—ニューサウスウェールズ大学との協働プロジェクト— 田嶋美砂子(茨城大学)	授業分析	マルチモーダル分析を用いて英語教育学に貢献し得ること 三野宮春子(大東文化大学)	動機づけ	短期大学生の英語使用不安と目標言語接触経験の関連性: オンライン英会話レッスンを通じての検証 吉野千乃(仙台青葉学院短期大学)

8月7日(土)	4室		5室		6室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
①9:30-9:55	ライティング	高等学校における英語ライティング指導の実態調査—学校では何が教えられているか?— 山下美朋(立命館大学), 長倉若(コロンビア大学ティーチャーズカレッジ),	リーディング	中学1年生のリテラシー指導が英語嫌いを減らす 楠本正義(札幌市立栄南中学校)	リーディング	Effects of Extensive Reading on Reading Comprehension and Reading Rate for EFL College Students 岩田哲(北海道武蔵女子短期大学)
②10:05-10:30	ライティング	日本人英語学習者のためのセンテンス・コンパニング練習: 難易度の検討 麻生雄治(大分大学)	リーディング	英語の音読に関する認識と読解の流暢さの関係 江田博之(筑波大学大学院生)	リーディング	読み手が概要を図式化したグラフィックオーガナイザーの評価—ループリックの評価者間信頼性の検証— 森好紳(白鷗大学)
③10:40-11:05	ライティング	ライティング力とコンポーネント・スキルズの相関関係: メタ分析による研究成果の統合 小島ますみ(岐阜市立女子短期大学), 印南洋(中央大学), 金田拓(帝京科学大学)	リーディング	英文読解における読み手の理解に繋げるグラフィックオーガナイザーの有効性の検証 工藤大奈(筑波大学大学院生)	リーディング	学習者の黙読時における音韻処理の検証—強勢の処理に着目して— 佐々木大和(帝京大学)

8月7日(土)	7室		8室		9室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
①9:30-9:55	リスニング	様々な英語リスニングに期待される教育的効果と課題 川島智幸(群馬大学)	教員養成・ 教師教育	ALTのナラティブ研究におけるインタビューとインタビューとの関係性 坂本南美(岡山理科大学)	教材・ カリキュラム	「読むこと」「書くこと」に焦点を当てた教科書分析： ELPの記述文との対照から 長田恵理, 米田佐紀子(玉川大学)
②10:05-10:30	リスニング	中学1年生に多様な英語発音を紹介する試み -ファーストコンタクトを工夫して- 若生深雪(仙台市立上杉山中学校)	教員養成・ 教師教育	Zoomを利用した模擬授業の工夫 -英語科教育法の共同実施- 階戸陽太(金沢学院大学)	教材・ カリキュラム	新中学校英語教科書でのジャンルとテキストタイプの明示的指導：読むこと・書くこと 今井理恵(新潟医療福祉大学), 松沢伸二(新潟大学), 峯島道夫(新潟県立大学)
③10:40-11:05			教員養成・ 教師教育	小学校教員養成課程の学生の外国語に関する自己評価の変容-コア・カリキュラムの視点から- 白土厚子(東京学芸大学)	教材・ カリキュラム	新中学校英語教科書でのジャンルとテキストタイプの明示的指導2：聞くこと・話すこと 松沢伸二(新潟大学), 今井理恵(新潟医療福祉大学), 峯島道夫(新潟県立大学)

8月7日(土)	10室		11室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
①9:30-9:55	語彙	新学習指導要領下における中学生のための語彙リストの開発 佐藤剛(弘前大学)	指導法	フィンランド型英語ブラクティスの開発とその実践報告 米崎里(甲南女子大学)
②10:05-10:30	語彙	How Can Cumulative Tests Be Applicable to Effective L2 Vocabulary Instruction? 金山幸平(北海道教育大学), 岩田哲(北海道武蔵女子短期大学), 笠原究(北海道教育大学)	指導法	言語技術を日本語と英語で学ぶ試み：「依頼と断りの技術」に関する分析 松本祐子(宮崎公立大学)
③10:40-11:05	語彙	日本人英語学習者のスペリング能力と発音能力について -エラー分析から見る学習者の特徴- 木村朱里(群馬県立女子大学大学院生)	指導法	クラッシュのインプット理論再考 齋藤嘉則(東京学芸大学教職大学院)

**全国英語教育学会 第46回長野研究大会**  
**自由研究・事例報告 アブストラクト集 8月7日(土) 発表④～⑥**

8月7日(土)	1室		2室		3室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
④13:55-14:20	スピーキング	意思決定タスクで使われる表現—上級英語話者のデータから— 白田悦之(函館工業高等専門学校)	発音	授業で使用する英語発音のカタカナ表記に関する考察:カナ/英文字混合表記の提案 静哲人(大東文化大学)	動機づけ	グループタスクにおけるリーダーシップとL2動機づけ 三ツ木真実(小樽商科大学), 廣森友人(明治大学), 吉村征洋(摂南大学), 桐村亮(立命館大学)
⑤14:30-14:55	スピーキング	スピーキング指導—intonation, rhythm, stressへの意識付け 岩崎恵実(秀明大学)	発音	日本人英語学習者の音韻認識力向上を目指す総合的英単語発音データベースの公開 高山芳樹(東京学芸大学)	動機づけ	遠隔英語授業における日本人大学生の楽しさとストラテジー使用、感情知能—長期的データを用いた研究— 大山廉(茨城大学)
⑥15:05-15:30	スピーキング	The Effect of Model Speech and Written Language on Enhancing L2 Learners' Noticing and Speaking Performance 江下陣(青山学院高等部)	発音	日本人高校生による英語発音のAIアプリに依拠した音素抽出分析をとおして 三好徹明(関西国際大学)	動機づけ	中学校英語学習者における動機づけと学習意欲減退に関する実証研究 西田理恵子(大阪大学)

8月7日(土)	4室		5室		6室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
④13:55-14:20	ライティング	英文要約が英作文の結束性に与える影響 丹藤永也(青森公立大学)	リーディング	読解教示が日本人中学生の英文読解に与える影響 前田宏美(昭和女子大学大学院生)	リーディング	読解速度に影響する速読教材の要因—語彙頻度レベルと英文の長さ—to注目して— 田中菜採(日本大学)
⑤14:30-14:55	ライティング	高校生は英作文で複雑な名詞句を使うようになるか?:1年間の縦断研究 伊藤泰子(神田外語大学), 加藤嘉津枝(日本大学), 白倉美里(東京学芸大学), 鈴木祐一(神奈川大学)	リーディング	物語文読解における旧情報の提示順序が日本人英語学習者の理解に与える影響 西聖(筑波大学大学院生)	リーディング	英文読解における処理負荷と文章の言語的特徴の関係—眼球運動測定を用いた検証— 名畑目真吾(筑波大学)
⑥15:05-15:30	学習者	文脈を考慮することがランゲージングの質的内容に与える影響 市川裕理(豊田工業高等専門学校)	リーディング	読解教示が物語文の時間・空間・登場人物に関する情報のつながりの理解に与える影響—矛盾検知と思考発話プロトコルの分析から— 卯城祐司(筑波大学), 小室希也(筑波大学大学院生), 小木曾智子(筑波大学大学院生/日本学術振興会), 名畑目真吾(筑波大学), 江田博之(筑波大学大学院生), 工藤大奈(筑波大学大学院生), 丹藤慧也(筑波大学大学院生), 三上洋介(筑波大学大学院生), 水書亮(筑波大学大学院生)	リーディング	英語の絵本を多読で活用するためのリーダビリティ調査—コールデコット賞作品を対象に— 藤井数馬(長岡技術科学大学)

8月7日 (土)	7室		8室		9室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
④13:55-14:20	SLA・ 言語習得	英語イメージ教育を受ける日本人中学生の音韻処理能力の発達：非単語復唱課題に基づく縦断的研究 清水真紀(群馬大学), 土方裕子(筑波大学)	教員養成・ 教師教育	小学校外国語(英語)指導者向けのポートフォリオを教職課程履修生に使わせて試みー英語力と語りかけ方の養成と外国語学習支援活動指導ー 山口高領(秀明大学), 藤井佐代子(中国学園大学)	教材・ カリキュラム	語彙習得における宿題の効果 日本人スペイン語学習者の動機づけと学習ストラテジーの関連性について 並里あけみ(群馬県立女子大学学生), 中島叶葉(群馬県立女子大学学生), 神谷信廣(群馬県立女子大学)
⑤14:30-14:55	SLA・ 言語習得	日本人英語学習者の英作文における後置修飾を含む名詞句の産出：学習者コーパスを用いた研究 田中広宣(東京大学大学院生)	教員養成・ 教師教育	小学校外国語模擬授業実践のKPT3観点のリフレクションとJPOSTLエレメンタリーの導入による成長 安達理恵(椋山学園大学)	教材・ カリキュラム	中学生による「英語狂言」の有効性 青柳有季(東京学芸大学附属小金井中学校)
⑥15:05-15:30	SLA・ 言語習得	英語の定冠詞選択における「一般・特定」の役割分析 高橋俊章(山口大学)	教員養成・ 教師教育	How ALTs' Teacher Agency Are Achieved in Professional Development 王林鋒(福井大学)	教材・ カリキュラム	発信語彙の定着を促すICT教材ーEasyConc for FlashCard.fmp12とBingoSheet for FlashCard.xlsmの開発と活用 日臺滋之(玉川大学)

8月7日 (土)	10室		11室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
④13:55-14:20	語彙	英検難易度に基づく多義前置詞in, on, atの語義分布と出現頻度 南部匡彦(国際短期大学)	指導法	学生の自己調整学習力の向上を意図した指導の効果 土屋麻衣子(福岡工業大学)
⑤14:30-14:55	語彙	説明文のNarrow Readingによる付随的語彙学習～異なる語彙領域と遭遇頻度の観点から～ 三上洋介(筑波大学大学院生)	指導法	SDGsに主眼を置いた英語CLIL授業における学習者の変容 工藤泰三(名古屋学院大学)
⑥15:05-15:30	語彙	大学生英語学習者の検索行動ー語彙問題の場合、読解問題の場合 小山敏子(大阪大谷大学)	指導法	Effects of the Use of AWE as Feedback to EFL Learners on Their Writing Development 石塚博規(北海道教育大学), 姚坤玥(北海道教育大学大学院生)

**国英語教育学会 第46回長野研究大会**  
**自由研究・事例報告 アブストラクト集 8月8日(日) 発表⑦～⑫**

8月8日(日)	1室		2室		3室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
⑦9:10-9:35	スピーキング	英語学習者が求めるフィードバックとディスカッション経験の関係分析 松岡真由子(追手門学院大学), 大竹翔子(神戸学院大学), 水本武志(ハイラブル株式会社), 森下美和(神戸学院大学)	テストティング・評価	小学校外国語の評価について話すこと【やり取り】思考力・判断力・表現力の評価に寄せて 矢野司(安曇野市立豊科北小学校)	動機づけ	L2使用に関する自己効力感がL2 WTCに与える影響ー小学3年生の授業実践からー 物井尚子(千葉大学)
⑧9:45-10:10	スピーキング	オンライン上の英語ディスカッションに関する一考察:書き起こしデータをもとに 森下美和(神戸学院大学), 大竹翔子(神戸学院大学), 松岡真由子(追手門学院大学), 水本武志(ハイラブル株式会社)	テストティング・評価	Computerの特性を活かした英語学力評価問題の開発に関する調査一情報を読み取って自分の意見を書くプロセスの評価事例 新美徳康(広島大学大学院), 松浦伸和(広島大学)	動機づけ	Japanese Junior High School Students' Attitudes Towards Challenges in English: A Perspective from the Self-Worth Theory リースエイドリアン(宮城教育大学), 竹森徹士(宮城教育大学)
⑨10:20-10:45	早期英語教育	図画工作を活用した小学校CLILの可能性についてーイタリヤの事例を中心としてー 二五義博(海上保安大学校)	テストティング・評価	全国学力調査の分析結果から見られる中学生の学力実態 松浦伸和(広島大学)	動機づけ	Impact of personality on motivation among Japanese learners of English 野村千尋(北海道教育大学大学院生), 菅原健太(北海道教育大学)
⑩10:55-11:20	早期英語教育	「書くこと」学習前の児童による英語の手書き文字 伊東哲(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科), 岩田伊玄(長野市立吉田小学校)	テストティング・評価	VELC Test Onlineを使用したオンラインプレイズメントテストの試み 横内裕一郎(弘前大学)	発音	小学校教員と中学校教員の英語音声指導に対する意識の違いと指導に及ぼす要因 河合裕美(神田外語大学), 高山芳樹(東京学芸大学)
⑪11:30-11:55	早期英語教育	デジタル教科書と教科書に準拠したワークシートを活用した小学校外国語科における「主体的な学び」の指導と評価 高橋美由紀(鈴鹿大学), 山内優佳(広島大学), 柳善和(名古屋学院大学)	テストティング・評価	学習者コーパスと産出評価: ICNALE GRAプロジェクトの狙い 石川慎一郎(神戸大学)	発音	リアルタイム・オンライン方式による英語音声指導の試み 大嶋秀樹(滋賀大学)
⑫12:05-12:30	早期英語教育	小学校英語における読むこと・書くことへの接続ー検定教科書に基づく頻度分析を通して 星野由子(千葉大学), 清水通(東北学院大学)	テストティング・評価	談話完成タスクを用いた英語発話自動採点システムの構築 林裕子(佐賀大学), 近藤悠介(早稲田大学), 石井雄隆(千葉大学)	文法	認知言語学の知見に基づく英語前置詞の教授法とその教育効果に関する研究 藤原隆史(松本大学)

8月8日(日)	4室		5室		6室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
⑦9:10-9:35	学習者	遠隔授業と学習スタイルの関連性についての研究: 内向的な学習者はオンライン授業を好むのか? 若本夏美(同志社女子大学), 森川慧子(同志社女子大学), 金衿佳(同志社女子大学)	リーディング	多読におけるフロー体験——大学生を対象にした調査から—— 種村俊介(金城学院大学)	リーディング	Extensive Reading, its Duration and Reading Volume GotoTakaaki(Kyushu University of Nursing and Social Welfare)
⑧9:45-10:10	学習者	遠隔授業におけるオーラルプレゼンテーション活動の意義 峰松和子(跡見学園女子大学)	リーディング	日本人大学生における第二言語と母語の一貫性・結束性判断 藤田賢(愛知学院大学)	リーディング	大学生の未知語を綴る力と語彙力 川崎真理子(新潟経営大学)
⑨10:20-10:45	学習者	E-learningにおける自学自習の促進に向けたチャットの活用 ~教員による声掛けとピアサポート~ 倉増泰弘(徳山工業高等専門学校), 東宮史(徳山工業高等専門学校), 柳本萌子(徳山工業高等専門学校), 関谷弘毅(広島学院大学)	リーディング	高校生の英語学習における協同的なリーディング活動の効果 サルバシヨ 有紀(兵庫教育大学大学院), 大場浩正(上越教育大学)	22. ICT・CALL	自律的英語学習を促進するTOEICアプリの活用 Sato Natsuko(東北工業大学)
⑩10:55-11:20	学習方略	要約プロセスの明示的指導が日本人英語学習者の英文要約に与える影響—自己調整学習サイクルを援用して— 丹藤慧也(筑波大学大学院生)	リーディング	再読が読解に及ぼす効果について: 異なる理解レベルと学習者の熟達度に焦点を当てて 伊東賢(茨城工業高等専門学校)	ICT・CALL	英語教育学・認知言語学・脳科学の知見適用による小・中・高・大学英語教材 システムの開発と構築 黒川愛子(帝塚山大学), 中野研一郎(関西外国語大学)
⑪11:30-11:55	言語政策・教育制度	日本人就労者の英語使用頻度: ウェブ調査(2021年)の統計的補正による推計 寺沢拓敬(関西学院大学)	リーディング	大学入学共通テストにおける推論発問の分析: 状況モデルの構築につなげる読解指導 柳瀬学(園田学園女子大学)	ICT・CALL	eTandemプログラムが英語学習者に及ぼす影響 小林翔(大阪教育大学), 中川右也(三重大学), 茅野潤一郎(新潟県立大学)
⑫12:05-12:30	言語政策・教育制度	The language issues in English medium instruction classroom: University faculty's rationales behind their language use 柴田美紀(広島大学)	リーディング	異なるReading-to-Writeタスクが日本人英語学習者の読解及びエッセイライティングに与える影響: Discourse Synthesis と Source Useの観点から 佐藤連理(筑波大学大学院)	心理言語学	第二言語ワーキングメモリの能力指標としてのCELP-Comテスト: Stroop taskとSimon taskとの関連性から 三木浩平(近畿大学), 門田修平(関西学院大学), 長谷尚弥(関西学院大学), 氏木道人(関西学院大学)

8月8日(日)	7室		8室		9室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
⑦9:10-9:35	SLA・ 言語習得	筆記ランゲージングを取り入れた教室実践の試み 石川正子(城西大学), 鈴木渉(宮城教育大学)	教員養成・ 教師教育	英語教員養成における授業研究のためのワークシート作成の試み 馬場千秋(帝京科学大学)	教材・ カリキュラム	肯定側(または否定側)に不利な英語ディベートの論題はあるのか: 上級者向け即興型英語ディベート大会の結果から 小林良裕(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所)
⑧9:45-10:10	SLA・ 言語習得	通訳教育が英語学習に与える影響について -英語を外国語として学ぶ日本人大学生を対象とした事例研究- 下吉真衣(関西外国語大学)	教材・ カリキュラム	Do ELT textbooks provide the opportunities to practice pragmatic knowledge? 川島千枝(栃木県立栃木工業高等学校)	教材・ カリキュラム	The Effect of Lessons Using YouTube on Motivation, English Learning, and Listening Ability of Junior High School Students 金本英朗(高岡市立志貴野中学校), 岡崎浩幸(富山大学), 石津憲一郎(富山大学)
⑨10:20-10:45	教員養成・ 教師教育	ALACTモデルを用いた若手英語教師の自律的な授業改善に関する研究 岡崎浩幸(富山大学)	教材・ カリキュラム	新課程用「英語コミュニケーションI」の教科書は高校生にどう受け止められるか?~各レッスンのトピックに注目して~ 本田亮(神奈川県立上溝高等学校)	教材・ カリキュラム	英語論文要旨に見る Metadiscourse Marker 石川有香(名古屋工業大学)
⑩10:55-11:20	教員養成・ 教師教育	Putting CEFR educational principles into practice through Action Research - The CARM Model. Birch Gregory(清泉女学院大学), 永井典子(茨城大学), Maria Gabriela Schmidt(日本大学)	教材・ カリキュラム	LOTSとHOTSの視点から考える高等学校教科書を活用した言語活動の提案 杉浦理恵(東海大学), 今井典子(高知大学), アシクロフトロバート ジョン(東海大学), ディーン エリック(東海大学), ハミルトン マーク(東海大学)	教材・ カリキュラム	2020年度小学校外国語科教科書分析 - Small Talk にどう活用したらよいか- 中野聡(陸学院大学)
⑪11:30-11:55	教員養成・ 教師教育	中学校における、英語の探究型学習(探究的な学習)に関する調査研究 金子淳(三重大学), 山口常夫(東北文科大学), ジェリー・ミラー(山形大学), 三枝和彦(山形大学)	教員養成・ 教師教育 <企業>	効果的・効率的・魅力的な研修にするための研修設計 - インストラクショナルデザインを活用した研修改善の試み- 河合千尋(プリティッシュ・カウンシル)	教材・ カリキュラム	大学教養教育英語科目における Extensive Reading の有効性 - 自己調整学習の観点から - 立田夏子(弘前大学)
⑫12:05-12:30	教員養成・ 教師教育	教師の変容を促す協働的でフレキシブルな教員研修プログラムに関する研究: 日本の高等学校英語科における事例 阿部雅也(新潟経営大学)	ICT・CALL <企業>	音読アプリ Qulmee の開発 - 自発的に音読ができる学習者の育成を目指して 松井悠(イースト株式会社)	教材・ カリキュラム	語彙的に簡単で短い英語詩は学習者にどう読まれるか: 読解の難しさを中心とした考察 西原貴之(広島大学)

8月8日 (日)	10室		11室	
発表時間	テーマ	発表タイトル・発表者	テーマ	発表タイトル・発表者
⑦9:10-9:35	語彙	言語形式と親密度がLexical Bundlesの処理に与える影響 岡野紗綾加(筑波大学大学院)	指導法	テスト・フィードバックの実証的研究：メタ認知、言語知識、動機の観点から 板垣信哉(尚絅学院大学), Leis Adrian(宮城教育大学)
⑧9:45-10:10	語彙	注釈による句動詞の付随的語彙学習：関与負荷仮説に基づいて 小室竜也(筑波大学大学院)	指導法	21世紀における外国語教育の多様性への寛容度－個別最適解と納得解は外国語教育にあり得るのか－ 藤居真路(広島県立尾道商業高等学校)
⑨10:20-10:45	語彙	単語の印象はスペリングテストのパフォーマンスに影響を与えるか 高波幸代(中央大学人文科学研究科)	指導法	Global Issues in Action Yanagawa Kozo(法政大学)
⑩10:55-11:20	語彙	毎回の授業で語彙に関する課題を課した場合の語彙力の変化 古樋直己(大阪工業大学)	指導法	TED Talks使用の遠隔授業で教員の説明とWritingの量が大学生の英語力に与える効果 長谷川修治(植草学園大学)
⑪11:30-11:55	語彙	英語心内辞書における名詞の結びつき—再構築・変容、精緻化— 折田充(熊本大学), 村里泰昭(熊本大学), 小林景(慶應義塾大学), 神本志光(熊本学園大学), 相澤一美(東京電機大学), 吉井誠(熊本県立大学), Richard Lavin(熊本県立大学)		
⑫12:05-12:30				

8月7日(土)

自由研究発表・事例報告

①09:30-09:55

②10:05-10:30

③10:40-11:05

8月7日(土) 第1室 ①9:30-9:55

タイトル	海外に繋がる子ども達が参加する外国語授業における学習支援員の役割
発表者	松井かおり
所属	朝日大学
アブストラクト	
<p>近年海外に繋がる子ども(以下 CLD 児;Culturally Linguistically Diverse Children)の数が増加し、外国人集住地区の小中学校では、英語授業においても母語通訳者(適応指導員)や日本人学習支援員の授業への入り込みや CLD 児の取り出しによる学習補助が行われている。</p> <p>本研究は、CLD 児に対する母語通訳者および学習支援員の言語観、異文化理解に関するビリーフと活動動機を聞き取り調査によって探る。彼らのビリーフが生成される過程での経験や葛藤に注目し、支援行動との関連に注目して分析を行った。今回の調査では、直近の経験が彼らの言語観や異文化理解に影響を与えており、2年前の聞き取り調査と比較し「揺れ」がみられた。さらに学習支援員としての活動動機と、英語教師、自治体、学校側からの期待との間のズレも浮き彫りになった。</p>	

8月7日(土) 第1室 ②10:05-10:30

タイトル	COIL を用いた英語教育の可能性
発表者	早瀬沙織
所属	中村学園大学
アブストラクト	
<p>COIL (Collaborative Online International Learning) とは、ICT を活用した国際間の双方向授業や協働学習のことを意味する。その発端は、2004 年にアメリカのニューヨーク州立大学 (SUNY) において、外国語学習目的での導入であった。現在、日本においても関西大学を始めとして語学の授業や国際交流を目的に COIL 型の教育が広がりを見せている。現在新型コロナウイルスが世界的に終息を迎えていない中、海外留学を志していた学生も留学の断念を余儀なくされ、様々な国際交流プログラムも実施困難な状況にある。そのため、オンラインでの国際交流活動はこれまでも実施されてきてはいるが、現状そしてこれからの国際交流を見据えた際に、COIL の需要は更に高まり、その特性は注目に値するものであると考える。本発表では、COIL が国際交流を通し、英語教育の視点からどのような可能性を秘めているのかを明らかにする。</p>	

8月7日(土) 第1室 ③10:40-11:05

タイトル	日豪間におけるオンライン学生交流—ニューサウスウェールズ大学との協働プロジェクト—
発表者	田嶋美砂子
所属	茨城大学
アブストラクト	
<p>2020年10月から11月にかけて、茨城大学の学部1年生(40名)とオーストラリアのニューサウスウェールズ大学で初級日本語を学ぶ学生(40名)との間で、オンライン交流プロジェクトを企画・運営した。本発表では、交流期間中並びに交流期間終了後に茨城大学側の参加者を対象として実施したアンケート調査結果をもとに、このプロジェクトの有効性と今後の改善点について論じる。有効性に関しては、「英語学習への動機づけ」「オーストラリア理解」など、企画の時点で見込んでいた観点に加え、「アジア地域への興味喚起」という予期し得なかった観点からも考察する。今後の改善点に関しては、「教員による先導」と「学生による自律的な参加」という相反する立脚点に言及しながら、プロジェクト全体を振り返り、オンライン学生交流のよりよいあり方について検討する。本発表を通じ、互いの言語的・非言語的資源を活用し合い、境界を越えてつながることの意味について探究したい。</p>	

8月7日(土) 第2室 ①9:30-9:55

タイトル	Conflicting deictic gestures in EFL classrooms: Their frequency, mechanisms, and perception by learners
発表者	神谷信廣
所属	群馬県立女子大学
アブストラクト	
<p>In the classroom, teachers' conflicting gestures—those gestures lacking in harmony with their accompanying speech—may be especially troublesome to second language learners who must expend much energy decoding the incoming language input. How often this occurs as well as how conflicting gestures are perceived by learners is an area that has been under-researched. In response to this lacuna, this study examined the instances of conflicting gestures performed by two EFL (English as a Foreign Language) teachers in Japan, and analyzed them from three different angles. Study 1 investigated how frequently conflicting gestures occur in real classrooms. In Study 2, among those conflicting gestures, two cases of deictic gestures were extracted from each of the two teachers in the study, with the intent of explaining why and how these gestures resulted in conflict with what was being said. Finally, in Study 3, the extent of learners abilities to notice the four deictic gestures in question was explored. The summary of our findings is that (a) conflicting gestures quite rarely occur in EFL classrooms, (b) deictic gestures that are conflicting to learners (receivers) may not be conflicting for teachers (performers), and (c) learners have difficulty identifying and explaining conflicting deictic gestures.</p>	

8月7日(土) 第2室 ②10:05-10:30

タイトル	English First-Person Instructor Speech Outnumbers Mixed Speech Third Person Utterances
発表者	橋本弦汰, 片桐徳昭
所属	北海道教育大学大学院学生, 北海道教育大学
アブストラクト	
<p>This study reports on the results of conducting classes in English in junior high and high school English instructors in Japan. Teachers need to focus on 'in-depth study by thinking for themselves through discussion' (MEXT). Therefore, English instructors must build classes where experiential learning takes place. We recorded two types of classes and transcribed the utterances in each class, and compared these two classes. The Japanese English teacher produced 1,220 tokens in the English-centered class (ECC). In contrast, the teacher produced 1,534 word-tokens in the mixed language class (MLC). The instructor used over 1,000 words in both classes. However, the instructor utterances used different subject types in the teacher talk depending on the target language use. We observed discrepancy between the ECC and the MLC. The instructor tended to use the pronoun I or we in the ECC while the instructor tended to use you, somebody, and everyone as the utterance subjects. We hypothesized that Japanese English teachers prefer communicating with students in Japanese as L1 to English as L2 in teaching grammar. The L2-centered instructor speech may enable L2 class as the MEXT proposes. English teachers need to create a device to encourage students to talk actively. Teachers must be trained not only teaching skills but English communication skills to realize 'in depth' learning induced by discussion. They must also consider some students cannot understand what the teacher says in English classes. Using L1 when necessary, sometimes makes the English classes more understandable.</p>	

8月7日(土) 第2室 ③10:40-11:05

タイトル	マルチモーダル分析を用いて英語教育学に貢献し得ること
発表者	三野宮春子
所属	大東文化大学
アブストラクト	
<p>対面の相互行為における意味の創造は、言語のみならず身体的振舞いや物理的環境の中に存在する記号を同時に組み合わせて行われる。言語記号を媒介した行為に比べて、身体化された行為は意識に上りにくいものの、発話が起る前提条件を整えたり、発話の意味付けに大きな影響を及ぼしたりする。</p> <p>また、多くの場合、人々は、発話以外の行動（何かを見る、触れる、歩く、渡す、等）に従事しながら、言葉を使っている。これまで英語教育学は、発話が埋め込まれた行為全体を捉えるという課題を十分に扱ってこなかったが、英語をはじめ利用可能なあらゆる資源を使って行為を遂行するための英語力が求められる昨今、学習者が従事する活動全体の只中で生起する発話をそのままに捉える方法が必要とされる。</p> <p>本発表では、マルチモーダル分析により英語教育学の諸課題にいかに関し得るか、「身体化」を焦点に考察を述べる。</p>	

8月7日(土) 第3室 ①9:30-9:55

タイトル	英語でのニュースを用いた大学の英語授業実践—学習動機に着目して—
発表者	今村梨沙
所属	関西大学
アブストラクト	
<p>本研究は、非英語専攻の大学2年生の英語必修科目(2020年春学期)において、英語圏のニュースを教材とし、英語でのニュースへの関心を喚起することができるのか、またニュースの話題についてオンラインで自分の意見を英語で発信することをどのように感じているか明らかにすることを目的としている。</p> <p>授業では毎回英語のニュースの視聴と問題演習を非同期型で、ニュースの話題に関して英語で発表とディスカッションを行う活動を同期型で行った。</p> <p>調査方法として、最後の授業で受講生63名に対して質問紙調査を実施した。その結果、多くの受講生が英語でのニュースへの学習に関心を持って取り組んだことがわかった。また全受講生がオンラインで英語を話すことを有意義に感じ、学習機会の確保ができたと感じていた。しかし、リスニング力・スピーキング力が伸びたと実感することはできず、苦手意識を払拭することが課題として示唆された。</p>	

8月7日(土) 第3室 ②10:05-10:30

タイトル	中学生英語学習者の動機づけプロファイルの探索的分析と検討
発表者	青山拓実
所属	信州大学
アブストラクト	
<p>本発表は、中学生英語学習者が持つ英語学習に対する動機づけの傾向を探索的に分析し、学習者の持つ特徴をいくつかのパターンに分類して解釈・説明することを目的とする。調査は長野県内の中学校4校において2016年度から2019年度にかけて実施された大規模なプロジェクトの一環として行われ、本研究は、英語学習の状況や動機づけ、コミュニケーションに対する意志などについて尋ねる質問紙調査によって得られたデータの一部を分析した。分析では、2019年度の中学3年生(N=475)から得られた回答のうち、動機づけの強さや英語学習への態度、英語使用に対する自信などの動機づけに関する5つの変数を用い、異なる特徴を持った学習者グループを特定した。それぞれのグループについて、動機づけやコミュニケーションに対する意志、生徒自身の英語運用能力に対する自己評価などの観点からさらに分析を行い、各グループに分類された学習者の特徴について議論した。</p>	

8月7日(土) 第3室 ③10:40-11:05

タイトル	短期大学生の英語使用不安と目標言語接触経験の関連性：オンライン英会話レッスンを通じての検証
発表者	吉野千乃
所属	仙台青葉学院短期大学
アブストラクト	
<p>新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、海外旅行や語学留学が困難となった状況のもと、英語を主専攻としない短期大学生たちには目標言語話者との日常的な接触は稀有となっている。本研究では、その対策として行ったオンラインで行う英会話レッスンを通して、目標言語話者との接触経験が、英語を主専攻としない短期大学生の感じる教室内外での英語使用不安にどのような影響をもたらすかについての検証を行った。その結果、オンラインレッスンを受講した学習者たちは、受講しない群と比較して、レッスン受講前から不安度が有意に低い傾向にあったが、レッスン後にはさらに不安度を軽減させていたことが明らかとなった。</p>	

8月7日(土) 第4室 ①9:30-9:55

タイトル	高等学校における英語ライティング指導の実態調査—学校では何が教えられているか？
発表者	山下美朋, 長倉若
所属	立命館大学, コロンビア大学ティーチャーズカレッジ
アブストラクト	
<p>高等学校では、論理的思考力を醸成するアカデミック・ライティングの指導が注目されている(山岡, 2019)。そのため筆者らは、生徒の英文を論理的に書く力を段階的に伸ばすため、高校と大学の教員が協同して指導案や教材を作成する研究を始めた。本発表では、その研究の事前調査として行った高校教員50名へのアンケートと、その一部に対し行ったヒアリングの結果を報告する。高校教員へのライティング指導実態調査は、大井(2014, 2016)を除き数は少ない。本調査の結果、多くの高校で意見文と描写文を中心とした指導が多く、生徒が年間に書く字数にも差があり、指導の違いが明らかであった。その要因は、使用する教科書、教員間の教育方針の違い、大学入試の障壁などであり、更には適切な指導方法や評価の研修を必要とする教員が多いことが分かった。調査対象は、比較的ライティング指導を行ってきた教員であり一般化はできないが、今後の指導に対し示唆が得られた。</p>	

8月7日(土) 第4室 ②10:05-10:30

タイトル	日本人英語学習者のためのセンテンス・コンバイニング練習：難易度の検討
発表者	麻生雄治
所属	大分大学
アブストラクト	
<p>L1の作文教育で積極的に行われているセンテンス・コンバイニング練習は、日本の英語教育ではあまり頻繁に行われていない。その理由の一つとして、センテンス・コンバイニング練習用の教材の不足が挙げられる。L1の作文教育で使用される練習問題(の書籍等)は数多く存在するが、それをそのまま日本の英語教育に援用することは語彙のレベル、英文のレベル、2文を1文にするだけでなく5文を1文にするような操作の複雑さのレベル等において、日本人英語学習者にとっては難易度が高く、効果的であるとはいえない。そこで本研究では、センテンス・コンバイニング練習の難易度に焦点をあて、日本人英語学習者のためのセンテンス・コンバイニング練習の教材開発のための基礎的調査を行い、日本人英語学習者にとって適切な難易度の検討を行った。その結果、3文以上の結合や埋め込み型の結合は難易度が高いこと等が確認された。</p>	

8月7日(土) 第4室 ③10:40-11:05

タイトル	ライティング力とコンポーネント・スキルの相関関係：メタ分析による研究成果の統合
発表者	小島ますみ, 印南洋, 金田拓
所属	岐阜市立女子短期大学, 中央大学, 帝京科学大学
アブストラクト	
<p>本研究は、第二言語（L2）学習者の持つL2言語知識や、認知的・メタ認知的能力、L2習熟度（リーディング力、スピーキング力）、母語（L1）のライティング力を予測変数とし、これらとL2ライティング力の関係について調査している101の研究（総参加者数112,475人）について、メタ分析を行った。また、4つの変数（年齢、L2習熟度、L1-L2の距離、学習環境）について、調整変数分析を行った。結果より、L2ライティング力と最も相関が高かった変数はL2習熟度で、強い相関が見られた。文法知識、語彙知識、綴りの知識、音韻符号化のスキル、L1ライティング力では、中程度の相関であった。それに対し、ワーキングメモリの容量、言語適性、動機付けは弱い相関しかなく、ストラテジー等のメタ認知力については、有意な相関は見られなかった。本研究結果について、さまざまなL2習熟度モデルやライティングモデルに照らして考察する。</p>	

8月7日（土）第5室 ①9:30-9:55

タイトル	中学1年生のリテラシー指導が英語嫌いを減らす
発表者	楠本正義
所属	札幌市立栄南中学校
アブストラクト	
<p>書きのいわゆるリテラシーが育っていない生徒が大幅に増えた。音韻認識やコーパスにきちんと基づいていない検定教科書を用いて授業をする限り、指導法を見直さない限り、ますます多くの生徒が英語嫌いになるし、その改善を小学校の責任だとするのは建設的でない。読み方を知らない語に、何度も触れていれば読めるようになるばかりか、その言語が嫌いになるのが自然だ。</p> <p>検定教科書と並行して正しい手立てで読み書き指導を行うことで、今まで救えなかった生徒たちを救いたい。「英語が好き」、「私にもできる」、「学校が楽しい」と思える生徒を増やして、彼らの居場所を学校に確保したい。</p>	

8月7日（土）第5室 ②10:05-10:30

タイトル	英語の音読に関する認識と読解の流暢さの関係
発表者	江田博之
所属	筑波大学大学院生
アブストラクト	
<p>英語教育において読解の流暢さは重要な側面の1つである (Gorsuch &amp; Taguchi, 2008)。流暢な読解は単語認知の自動化によって達成される。その自動化を促進する音読は間接的に読解の流暢さを促進する (Chang, 2012)。さらに音読を行う上で、自身の音読方略や音読で重視することなどの学習者の有する認識は音読力や英語学力に影響を与えることが明らかになっている (宮迫, 2002)。そこで本研究では、日本人大学生を対象に質問紙調査を実施し、学習者の有する音読に関する認識の構成因子を明らかにした。また、語彙レベルが統制されたテキストを用いて読解の流暢さを測定し、読解の流暢さと音読の認識の関係を検証した。その結果、音読の際に文法やイントネーションを意識することは読解の流暢さと関係がなく、音読の際にできることのみ相関がみられた。本発表では音読指導に対する教育的示唆についても議論する。</p>	

8月7日(土) 第5室 ③10:40-11:05

タイトル	英文読解における読み手の理解に繋げるグラフィックオーガナイザーの有効性の検証
発表者	工藤大奈
所属	筑波大学大学院生
アブストラクト	
<p>テキストの内容を読み手が視覚的に捉えられるように図式化したものを、グラフィックオーガナイザー (以下 GO) と呼び、GO により英文読解における内容理解が促進されるとされている。本研究では、日本人 EFL 学習者である大学生を対象に、英文読解における GO の内容理解への有効性を検証した。対象者の熟達度を均一にしたのち、統制群には 500 語程度の英文の読後、TF 問題を課した。実験群には Grabe (2009) が提唱した GO のうち、メインアイデアやトピックセンテンスといった内容理解のための要点をまとめ、矢印で繋げながら結論に導く形式を採用し、英文読後に確認できるように提示した。その結果、内容理解を促進するという先行研究を支持する結果とは異なった。GO により、読み手が構築した状況モデルと GO の要点に差異が見られ、混乱が生じたと考えられるため、GO を使用した読解指導に示唆が得られた。</p>	

8月7日(土) 第6室 ①9:30-9:55

タイトル	Effects of Extensive Reading on Reading Comprehension and Reading Rate for EFL College Students
発表者	岩田哲
所属	北海道武蔵女子短期大学
アブストラクト	
<p>Reading is often regarded as one of the most important language skills in an EFL context and it is frequently pointed out that extensive reading should be incorporated into the curriculum and integrated with other classroom-based activities. The purpose of this research is to investigate whether extensive reading plus output activities can better facilitate participants' reading comprehension and reading fluency than traditional grammar-translation methods plus intensive reading. It also attempts to reveal how many words need to be read to make a noticeable difference, as well as to prescribe a possible instructional model for Japanese EFL classrooms. The participants of this research were 87 first-year female college students from the faculty of Economics (non-English majors). The course was almost two semesters long and the GTEC Academic test was used to assess reading comprehension. Reading rate tests were conducted for assessing reading rates. Questionnaires were also conducted to investigate the total study time. The number of words the students in the extensive reading group read were counted by the M-Reader system. The results suggest that learners should read at least 50,000 words in order to be as effective as they could be through conventional teaching methodologies and reading fluency can be improved, regardless of the form of instruction or the total amount of words read. Appropriate intervention such as extensive reading can be important to sustain students' incentive to learn English.</p>	

8月7日(土) 第6室 ②10:05-10:30

タイトル	読み手が概要を図式化したグラフィックオーガナイザーの評価—ループリックの評価者間信頼性の検証—
発表者	森好紳
所属	白鷗大学
アブストラクト	
<p>本研究では、英語学習者の読み手が文章の概要を図式化したグラフィックオーガナイザーを対象とし、ループリックの評価者間信頼性が検証された。実験テキストとして、文章全体の要点、各パラグラフの要点、詳細情報を含む2つの説明文が用いられた。実験では、日本人大学生28名が実験テキストを読解し、テキスト情報とその階層的な関係を反映するグラフィックオーガナイザーを作成した。その評価には、事前に作成されたグラフィックオーガナイザーのモデルと、予備実験(森, 2020)を基に改編されたループリックが用いられた。ループリックの観点には、(a)グラフィックオーガナイザーの構造、(b)モデルの内容の反映、(c)要点・詳細情報の産出、(d)産出された各項目の情報量、(e)テキスト情報の関連づけが含まれた。3名の評価者間信頼性が産出され、その結果を基にグラフィックオーガナイザーを評価するループリックと、その信頼性に関わる要素について議論する。</p>	

8月7日(土) 第6室 ③10:40-11:05

タイトル	学習者の黙読時における音韻処理の検証—強勢の処理に着目して—
発表者	佐々木大和
所属	帝京大学
アブストラクト	
<p>多くの研究者によって読み手は音読中だけでなく、黙読中にも語や文の音韻情報を処理していると主張されている。しかし、黙読中の音韻処理に関する研究は、母語話者を対象に盛んに行われているものの、学習者を対象とした研究は少ない。本研究は、日本人英語学習者の黙読時における音韻処理、特に強勢の処理に着目して検証を行った。実験では、文の強勢位置を大文字で表し、強勢一致/強勢不一致条件のマテリアルを作成した。強勢一致条件では、単語の実際の強勢位置と大文字が一致しており、強勢不一致条件では、単語の実際の強勢位置と大文字が一致していない。日本人大学生に以上の条件で True or False 形式の理解度問題を課し、その後、読解熟達度を測定した。分析の結果、日本人英語学習者の黙読時の強勢の処理に関して示唆が得られた。この結果をもとに、本発表では、学習者の黙読時の音韻処理に関する特徴について議論する。</p>	

8月7日(土) 第7室 ①9:30-9:55

タイトル	様々な英語リスニングに期待される教育的効果と課題
発表者	川島智幸
所属	群馬大学
アブストラクト	
<p>共通テスト英語リスニングにアメリカ英語以外の英語なまりが登場したことは、記憶に新しい。今後、多様な英語音声に慣れることを目的とする指導が増えることも予想される。これに関連して、来年度から実施される高等学校学習指導要領英語編の解説に次のような記述がある。「『様々な英語が国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態にも配慮する』とは、現代の英語は、世界で広くコミュニケーションの手段として使われている実態があり、語彙、綴り、発音、文法などに多様性があるということに気付かせる指導を行うということである。」(文部科学省, 2018, p.133)。そこで本発表では、これまで筆者が高校生や大学生を対象に行った実験授業を参考に、様々な英語リスニング指導の具体例と期待される教育的効果、課題について考察する。</p>	

8月7日(土) 第7室 ②10:05-10:30

タイトル	中学1年生に多様な英語発音を紹介する試み ―ファーストコンタクトを工夫して―
発表者	若生深雪
所属	仙台市立上杉山中学校
アブストラクト	
<p>中学生は、馴染みの発音を聞き分けて自分の好みを識別し、その受容態度は、授業で多く採用されているアメリカ英語に偏重しているとの報告がある(松浦・若生, 2019)。本事例では、国際共通語としての英語の役割に意義を見出し、どんな話者の発音も偏見なく受け入れ、汎用性の高い英語力の育成を目指した。具体的には、(1) 中学1年生の英語の授業で、顔写真を用いながら、イラク人のNNSやNSら6人の音声提供者の人物紹介をした。(2) 翌週、2回に渡り、6人が吹き込んだ教科書本文の音声を合計約15分間リスニングさせた。検証のため、事前、(1)と(2)の後の合計3回、アンケート(Rindal, 2010を参考)用に作成したNNSを含む話者の発音を聞かせ、その好みや印象などを評価させ、中学生の態度の変化を測定した。結果、シンガポール人の発音に対しての平均値が、3.31, 4.04, 4.17と上昇し、様々な英語とのわずかな接触体験が、親しみのない発音への印象を好転させたことが分かった。</p>	

8月7日(土) 第8室 ①9:30-9:55

タイトル	ALT のナラティブ研究におけるインタビュアーとインタビューーとの関係性
発表者	坂本南美
所属	岡山理科大学
アブストラクト	
<p>本研究では、Assistant Language Teacher (ALT)へのインタビューを通して、彼らのナラティブの中で、インタビュアーの関与がどのように ALT の成長を引き出す営みとして機能していたかを質的に分析する。「ナラティブ」という言葉は一人称の語りに焦点を当てているが、本研究でインタビューを行った ALT たちは、自らの教育実践を他者であるインタビュアーと共有することで、自己の授業を追体験しながら語っている。彼らの語りは、自らの教授経験をどのように解釈し提示しているのか、何が、または誰が彼らの教授理論やアイデンティティの構築に影響したのかを分析する強力なツールとなった。本研究では、ALT の語りから明らかになった「教師の気づきによる成長モデル」のもと、インタビューが語り手の経験を解釈する媒介的空間として機能するためのインタビュアーの関与とそのコードスイッチングについて考察する。</p>	

8月7日(土) 第8室 ②10:05-10:30

タイトル	Zoom を利用した模擬授業の工夫 –英語科教育法の共同実施–
発表者	階戸陽太
所属	金沢学院大学
アブストラクト	
<p>本発表は、Zoom を活用した模擬授業を、2つの大学の英語科教育法を共同で行う取り組みについての効果と課題を探ることを目的としている。教職課程のある学部での英語科教育法の履修者は少人数での授業になる傾向がある。発表者は、勤務先の異動により、同じ県内の大学へ移った。諸事情により、前任校の3年生の英語科教育法を受け持つことになった。現勤務校の3年生英語科教育法の履修者は4名、前任校は5名と、ともに少人数である。それに伴い、模擬授業を行う際、生徒役の学生が少なくなってしまう。そこで、2つの英語科教育法を同時に行い、模擬授業を合わせて行うことにした。移動も可能な距離ではあるが、新型コロナウイルス感染症拡大の状況のため、Zoom を使用して遠隔で行うこととした。学生の振り返りとインタビューを分析し、Zoom を利用した模擬授業の効果と課題について提示する。</p>	

8月7日(土) 第8室 ③10:40-11:05

タイトル	小学校教員養成課程の学生の外国語に関する自己評価の変容—コア・カリキュラムの視点から—
発表者	白土厚子
所属	東京学芸大学
アブストラクト	
<p>2019年度から新教職課程がスタートし、小学校教員養成課程に外国語(英語)が新たに加えられた。小学校教員養成外国語(英語)コア・カリキュラムにより、大学の教員養成課程で習得すべき共通の資質・能力が明確化され、専門的事項と指導法を一体的に学ぶことも可能になった。そこで本実践研究では、初等英語科教育法(外国語の指導法)の受講生(2年生)と2年時にすでに初等英語科教育法を履修した英語科研究(外国語に関する専門的事項)の受講生(3年生)を対象に、それぞれコア・カリキュラムに基づく15回の授業を行い、両受講生の知識・技能及び英語運用能力に関する自己評価を調査した。初回と最終日の授業で質問紙調査を実施し、学生の自己評価にどのような変化があったかを分析し、その結果を基に受講生はどのように学んだか、さらにどのような指導の改善を図るべきかを考察する。</p>	

8月7日（土） 第9室 ①9:30-9:55

タイトル	「読むこと」「書くこと」に焦点を当てた教科書分析：ELPの記述文との対照から
発表者	長田恵理, 米田佐紀子
所属	, 玉川大学
アブストラクト	
<p>平成29年告示小学校学習指導要領はCEFRの考え方を基に作成されており、A1レベルの半ば程度までの到達目標が示されている（文部科学省, 2015）。一方、日々の学びからどのような過程を経てこの目標に到達するのか明記されていない。本研究では、学びの過程の可視化を目的とする学習者ポートフォリオ（日本版）作成のための基礎調査のひとつとして、特に「読むこと」「書くこと」の2技能の活動・内容・テーマに焦点を当て、採択率上位2社の教科書内容について検討した。CEFRに基づいた、学習者の自律（自立）的学習者支援ツールであるELP（ヨーロッパ言語ポートフォリオ）のCan-Do記述文と照合したところ、児童を含め家族などの人物や部屋など物を描写して伝えることや相手のことを尋ねる活動が伝えるより少ないなどが示された。これらの結果からA1レベルまで到達する可能性について得られた示唆を発表する。</p>	

8月7日（土） 第9室 ②10:05-10:30

タイトル	新中学校英語教科書でのジャンルとテキストタイプの明示的指導：読むこと・書くこと
発表者	今井理恵, 松沢伸二, 峯島道夫
所属	新潟医療福祉大学, 新潟大学, 新潟県立大学
アブストラクト	
<p>新学習指導要領は、中学生がまとまりのある英語を聞き、まとまりのある文章を読み、まとまりのある内容を話し、まとまりのある文章を書くことができるようになることを目標にしている。まとまりのある英語や文章はテキストと呼ばれる。テキストはコミュニケーションの目的を持った、文を超えたまとまりのある言語単位を指し、口頭テキスト、書面テキスト、それに多モードテキストがある。テキストのレベルでの読み書きの技能の伸長には、ジャンル（テキストの目的・型）とテキストタイプ（テキストの形式）にかかわる知識を明示的に指導するジャンル準拠教育が有効である。これは豪州他の実践で明らかにされている。「令和3年度より18冊の新中学校英語教科書が使われているが、そこではジャンルとテキストタイプにかかわる知識は、どれほど誌面に明示されているだろうか。」本発表はこの疑問についての調査から、読む技能と書く技能についての結果を示す。</p>	

8月7日(土) 第9室 ③10:40-11:05

タイトル	新中学校英語教科書でのジャンルとテキストタイプの明示的指導2：聞くこと・話すこと
発表者	松沢伸二, 今井理恵, 峯島道夫
所属	新潟大学, 新潟医療福祉大学, 新潟県立大学
アブストラクト	
<p>新学習指導要領は、中学生がまとまりのある英語を聞き、まとまりのある文章を読み、まとまりのある内容を話し、まとまりのある文章を書くことができるようになることを目標にしている。まとまりのある英語や文章はテキストと呼ばれる。テキストはコミュニケーションの目的を持った、文を超えたまとまりのある言語単位を指し、口頭テキスト、書面テキスト、それに多モードテキストがある。テキストのレベルでの読み書きの技能の伸長には、ジャンル（テキストの目的・型）とテキストタイプ（テキストの形式）にかかわる知識を明示的に指導するジャンル準拠教育が有効である。これは豪州他の実践で明らかにされている。「令和3年度より18冊の新中学校英語教科書が使われているが、そこではジャンルとテキストタイプにかかわる知識は、どれほど誌面に明示されているだろうか。」本発表はこの疑問についての調査から、聞く技能と話す技能についての結果を示す。</p>	

8月7日(土) 第10室 ①9:30-9:55

タイトル	新学習指導要領下における中学生のための語彙リストの開発
発表者	佐藤剛
所属	弘前大学
アブストラクト	
<p>中学校において新学習指導要領が施行され、それに基づく検定教科書を使用した授業が実施されている。指導する語彙が、小学校で600語～700語程度、中学校で1,600語～1,800語程度、高等学校で1,800語～2,500語程度と大きく増加している。佐藤(2021)が小学校の検定教科書を分析した結果、実際に扱われている語は1,300語程度であり、600語から700語を大きく超えていることが明らかになった。中学校の検定教科書においても同様に語彙数の大きな増加が予想される。これまでも発表語彙と受容語彙の区別など軽重をつけた指導が行われてきたが、今後はより実証的なデータに基づく効率的な語彙指導が求められる。本研究は、6社から出版されている中学生用検定教科書のデータから、ARFを基準とした語彙リストの作成を目的とする。作成したリストの語彙とこれまでの中学校の検定教科書や小学校の教科書の語彙を比較することで、これからの中学校における効果的な語彙指導のあり方を検討する</p>	

8月7日(土) 第10室 ②10:05-10:30

タイトル	How Can Cumulative Tests Be Applicable to Effective L2 Vocabulary Instruction?
発表者	金山幸平, 岩田哲, 笠原究
所属	北海道教育大学, 北海道武蔵女子短期大学, 北海道教育大学
アブストラクト	
<p>Recent studies have found that learners who took cumulative tests on both recently and previously learned items retained them better than those who took non-cumulative tests. The purpose of this study was to apply cumulative testing to L2 vocabulary instruction (ACT: applied cumulative tests). In Week 1, Japanese university freshmen took a pretest that included 50 target words. Then they were given a word list that contained 50 English and Japanese word pairs and were asked to remember as many words as possible outside classroom hours. In Week 2, they took a quiz that included 10 words chosen randomly from all the words. These small tests continued for five consecutive weeks (Week 2 to 6). In Week 7, they took a posttest that included all 50 words. Results were significant: an increase in the total amount of study time and in the number of times a certain word appeared in small quizzes was directly proportional to an increase posttest scores. It was also indicated that having a run of higher scores in the small tests decreased participants' study time, but ACT benefited from the spacing effect. This study discusses how English teachers can apply the results to L2 vocabulary instruction.</p>	

8月7日(土) 第10室 ③10:40-11:05

タイトル	日本人英語学習者のスペリング能力と発音能力について —エラー分析から見る学習者の特徴—
発表者	木村朱里
所属	群馬県立女子大学大学院生
アブストラクト	
<p>本研究では日本人英語学習者のスペリングと発音について、&lt;l&gt; ⇔ &lt;r&gt;または&lt;b&gt; ⇔ &lt;v&gt;の置換の要素を含む既知語と未知語を使用したスペリングテストと発音テストのエラー分析を通して、学習者1人ひとりに焦点を当て、学習者ごとのスペリングと発音の特徴を見出すことはできるのかを検討した。調査の結果、学習者によってスペリング能力と発音能力が一貫している学習者と一貫していない学習者が存在することが分かった。またスペリングで学習者が起こしやすい置換エラーの項目の分類からも、個人ごとに起こしやすいエラーが異なっていた。発音では、/r/ → /l/と/v/ → /b/両方の置換エラーを起こす学習者が多かったが、個人によって特徴があることが確認された。スペリングでは特に個人差が見られたため個人ごとに起こしやすいエラーを診断的に教師が見つけ、フィードバックを行い、学習者自身に自分が起こしやすいエラーを理解させることが必要だと思われる。</p>	

8月7日(土) 第11室 ①9:30-9:55

タイトル	フィンランド型英語プラクティスの開発とその実践報告
発表者	米崎里
所属	甲南女子大学
アブストラクト	
<p>本研究では、日本の小学校児童の実態に合わせて開発したフィンランド型のプラクティスを用いた英語授業を公立小学校で行った結果、児童の英語力がどのように変化したかを報告する。日本の検定教科書で扱われている学習語彙や表現、文・文構造（文法）を用いて、フィンランド型のプラクティスを開発し、ワークブックとして冊子にまとめた。開発したプラクティスの特徴として、語彙と文法を組織的に結びつけ、定着を目指し使いながら学んでいけるようなプラクティスとなるよう作成した。いわゆるドリル的なプラクティスも本研究ではアウトプットにつなげるプラクティスとして捉え、積極的に取り入れた。本発表では、6年生の4クラスで1学期間ワークブックを使い授業を行なった結果、児童の英語にはどのような変化が見られたか、成果と課題を報告する。</p>	

8月7日(土) 第11室 ②10:05-10:30

タイトル	言語技術を日本語と英語で学ぶ試み：「依頼と断りの技術」に関する分析
発表者	松本祐子
所属	宮崎公立大学
アブストラクト	
<p>本研究は言語技術を日英両方言語で学ぶ試みの一環として行われた。プレリサーチの質問紙調査では、6つの言語技術のうち「依頼と断りの技術」が「最も役に立つ」と同時に「使用が最も難しい」と評価された。そこで今回は「依頼と断りの技術」に焦点を当て、更に詳細な分析を行った。具体的には、言語技術学習の前後にプレテストとポストテストを両言語で実施し、その記述回答を基に比較分析を行った。比較のポイントは（1）回答の記述量と（2）各サブスキルの使用回数である。サブスキルとは「依頼」や「断り」を達成するために必要な複数の下位項目で、既習内容である。この2点について、t検定を行い、言語技術学習の前後で有意な差が見られるかどうかを検証した。更に言語の違いによる言語技術使用の特徴的な傾向を記述的に分析した。これらの結果に基づき、言語技術使用に関する学習者の課題を明らかにし、効果的な指導方法を提案する。</p>	

8月7日(土) 第11室 ③10:40-11:05

タイトル	クラッシュェンのインプット理論再考
発表者	齋藤嘉則
所属	東京学芸大学教職大学院
アブストラクト	
<p>クラッシュェンが提唱した第2言語習得の包括的な習得理論、インプット理論は一時期、一世を風靡した。この理論からひとつの英語科教授法が考案された。それがナチュラル・アプローチである。その後も Task-based Learning and Teaching や CLILE などの教授法が提案されている。しかし、実際の中学校や高等学校の英語教室ではどのように英語が教授学習されているのだろうか。主に公立小学校や中学校、高等学校の英語科授業の参観からその傾向を探りたい。事前の予備調査では、多かれ少なかれ授業そのものが検定教科書が具体化している指導方法や指導の手順(過程)により授業が行われていることがわかる。そこで、さらに、教科書の構成を確認するとクラッシュェンのインプット理論の影響がぬぐい切れない。インプット理論をもう一度確認して、それが現在、英語の教授学習にどのように生かされているのかを考えたい。</p>	

8月7日(土)

自由研究発表・事例報告

④13:55-14:20

⑤14:30-14:55

⑥15:05-15:30

8月7日(土) 第1室 ④13:55-14:20

タイトル	意思決定タスクで使われる表現—上級英語話者のデータから—
発表者	白田悦之
所属	函館工業高等専門学校
アブストラクト	
<p>学習者にタスクを行わせる際、事前に役に立つ語彙や使える表現を指導者が準備しておけばプレ、ポスト・タスクで活用することができ、タスクを効果的に用いることができる。しかし指導者が考える語彙や表現を学習者が必ずしも使うとは限らず、このことがタスクの扱いを難しくしている要因の一つと言える。ネイティブや英語を上手に話せる話者に事前にタスクを行ってもらい、収集したデータからよく使われる定型表現や役に立つ表現を抽出しそれを指導の際に学習者に示せるようにしておくことで、タスクをより扱いやすくと考える。また、タスク遂行の音声はプレ、ポスト・タスクでの活用につながる。本発表では、フィリピン人の上級英語話者に行ってもらったタスクの音声と文字起こしたデータからピックアップした学習者に学ばせたい定型表現や使える表現を紹介し考察する。タスクは順番、計画、予定などを決める意思決定タスクを用いた。</p>	

8月7日(土) 第1室 ⑤14:30-14:55

タイトル	スピーキング指導—intonation, rhythm, stress への意識付け
発表者	岩崎恵実
所属	秀明大学
アブストラクト	
<p>勤務校にて『英語スピーチコミュニケーション論』の授業を担当している。この授業では、英語と日本語の音声体系の違いを理解し、「聞き手に伝わる話し方」を習得することを目標としている。授業を通してわかることは、本文を平面的に読み、適切に区切らずに発話する学生が多いということである。英語が強弱の言語であり、抑揚をつけて話さないと不自然であることを認識していない、または認識していても実行に移せない様子が見られる。本文を読むことに必死で、区切り方に意識が向かないことも多い。表現力を豊かにするためには、語彙力を増やし文章力を高めるだけでなく、英語特有のイントネーション、リズムや強勢に注意を払って言葉に表すことが大切である。会話力を高めるための話し方の実践指導を、どのように英語教育の場面に取り入れていくかについて考えたい。</p>	

8月7日(土) 第1室 ⑥15:05-15:30

タイトル	The Effect of Model Speech and Written Languaging on Enhancing L2 Learners' Noticing and Speaking Performance
発表者	江下陣
所属	青山学院高等部
アブストラクト	
<p>The purpose of this study was to investigate the effectiveness of providing model speeches to L2 learners after they had performed a speech themselves, and giving them an opportunity to compare and make notes of what they noticed during the comparison in the form of written languaging. Japanese EFL learners (N = 10) first performed a picture prompt speaking task. Then, they listened to a model speech and took notes on what they noticed. They were then told to do the same speaking task twice, immediately and one week later. The descriptions of written languaging were considered as a sign of noticing and were analyzed. In addition, the speaking performances before, immediately after, and one week after the intervention were analyzed in terms of accuracy and fluency. The results showed that learners noticed lexical items the most, but some noticed grammatical aspects of the model speech. In terms of product change, accuracy and fluency improved significantly after the model speech intervention. Although the number of participants was insufficient to derive robust results, this study showed the potential of giving a model speech and written languaging in enhancing learners' noticing of language and development of speaking performance, which had been found in the written modality (Hanaoka, 2007). Pedagogically, the results of this research suggest using a model speech and written languaging in place of (or in conjunction with) recasting or other feedback methods in the instruction of speaking tasks.</p>	

8月7日(土) 第2室 ④13:55-14:20

タイトル	授業で使用する英語発音のカタカナ表記に関する考察：カナ／英文字混合表記の提案
発表者	静哲人
所属	大東文化大学
アブストラクト	
<p>言うまでもなく英語の発音の正確な表記には国際音標文字が必要であり、日本語のカナを用いて正確に表記することは到底できない。一方、学校英語教育の現場では一定の割合でカタカナによる発音表記が行われているという現実が存在する。カタカナ表記についての異論がなくなることはないと思われるが、それと同時に、教育現場でのカタカナ表記の利用がなくなることもないと考えられる。ただし一口にカタカナ表記と言ってもその実情はさまざまであり、特定の語の発音のカタカナ表記は一意に決まらない。もしカタカナを利用するならばより「良い」表記によることが望ましいのは言うまでもない。本発表ではカタカナ利用の英語発音表記の現状を概観し、関連文献を踏まえた上で、教室での使用を前提とした、「子音は英文字またはカナで、母音はカナで」を大原則としたカナ／英文字混合表記システム (system [スイ s トウ m]) を提案する。</p>	

8月7日(土) 第2室 ⑤14:30-14:55

タイトル	日本人英語学習者の音韻認識力向上を目指す総合的英単語発音データベースの公開
発表者	高山芳樹
所属	東京学芸大学
アブストラクト	
<p>日本人英語学習者への音声指導においては、日本語の干渉により英語の聞き取りや「通じる英語発音」の獲得に支障をきたさないよう留意する必要がある。特に重要なのが音韻認識力の向上だが、小、中、高のいずれの段階でも十分な指導は行われていない。そこで、音韻認識力向上を目指す指導の重要性を理解させた上で、英語教員が学習者に適した活動を考案したり、教材を作成したりするのに役立つデータベース(DB)を構築し、公開した。このDBは、小学校(931語)、中学校(2,861語)、高校(2,260語)で学習する英単語について、発音記号や分綴、音節数や音節内構造、強弱パターン、ジャンルなどの情報が付与されており、発音音声も聞くことができる。検索機能も充実しており、特定の条件に合う単語を瞬時に探し出すことができる。本発表では3年間に及ぶDB構築作業のプロセスや、音韻認識・発音指導の際の具体的な使用法について伝える。</p>	

8月7日(土) 第2室 ⑥15:05-15:30

タイトル	日本人高校生による英語発音の AI アプリに依拠した音素抽出分析をとおして
発表者	三好徹明
所属	関西国際大学
アブストラクト	
<p>本発表は、日本人高校生の英語学習者 (n=100) の発音習得状況について、AI 搭載型発音アプリ ELSA Speak (以下、アプリ) を用いて検証したものである。方法は、参加者が、アプリに設定された評価テストの 16 の英文をそれぞれ読み上げ、その録音データをアプリの音素抽出機能で分析した。ネイティブの発音を基準 (100%) として、(1) /ɛɪ/ /ɛ/ /æ/, (2) /p/ /t/ /k/, (3) /j/ (y) /ʒ/ /dʒ/, (4) /m/ /n/ /ŋ/, (5) /u/ /ʊ/, (6) /l/ /r/, (7)イントネーション、(8) /i/ /ɪ/, (9) CONSONANT CLUSTERS、(10) DIPHTHONGS、(11) /h/ /f/ /v/, (12) /ʒ/, /ʒ/, /tʃ/、/dʒ/, (13) /æ/ /ʌ/ /ɑ/, (14) /ə/, (15) MIXED SKILLS、(16) /r/ /ɜ/ /ə/, (17) /w/ /v/ /b/, (18) ENDING SOUNDS、(19) /θ/ /ð/, (20) /s/ / ʒ/ /z/ の 20 項目について、最尤法を用い、プロマックス回転で因子分析を行ったところ、5 回転で解が収束し、因子の解釈による命名には到っていないが、/r/ /ɜ/ /ə/ などの r 音の「接近音」、/p/ /t/ /k/ などの「閉鎖音」、/n/ の「歯茎鼻音」、/θ/ /ð/ の「歯摩擦音」、/s/ / ʒ/ /z/ などの「歯茎摩擦音」が、日本人高校生英語学習者の発音要素として影響を与えている。</p>	

8月7日（土） 第3室 ④13:55-14:20

タイトル	グループタスクにおけるリーダーシップと L2 動機づけ
発表者	三ツ木真実, 廣森友人, 吉村征洋, 桐村亮
所属	小樽商科大学, 明治大学, 摂南大学, 立命館大学
アブストラクト	
<p>本研究では、事前に指名されたリーダー（Assigned Leader: AL）と自然発生のリーダー（Emergent Leader: EL）がいる2種類のグループを対象に、リーダーの存在や振る舞いがグループタスクにおけるメンバーの動機づけとグループダイナミクスに与える影響を比較・検証した。タスク中の動機づけ変化を問う質問紙とメンバー間のやり取りの書き起こしを数値化したものをデータとして分析した。その結果、ALグループがタスク開始時から動機づけを高く維持した一方で、ELグループは動機づけが不安定だった。その後のインタビューからは、ALのポジティブな態度や振る舞いが、メンバーの動機づけに好影響を齎していたことがわかった。自然発生の任すよりはリーダーを指名してその役割を意識させることがリーダーの動機づけを高め、またその存在がメンバーのタスク中の高い動機づけを最後まで維持し、さらにはグループによるタスクへのダイナミックな取り組みの要因となることが示唆された。</p>	

8月7日（土） 第3室 ⑤14:30-14:55

タイトル	遠隔英語授業における日本人大学生の楽しさとストラテジー使用、感情知能 —長期的データを用いた研究—
発表者	大山廉
所属	茨城大学
アブストラクト	
<p>第二言語習得に影響を与える要因として、学習者情意の正の側面である楽しさ（foreign language enjoyment: FLE）（Dewaele &amp; MacIntyre, 2014）が注目されるようになり、習熟度やパフォーマンスとの正の相関関係が報告されている（e.g., Dewaele &amp; Alfawzan, 2018）。2020年度、大学では全国的に遠隔での授業実施が求められ、それは学生にとって負の情意である不安を高める要因になったと考えられる。このような状況の中、学生が英語授業のどのような要素に楽しさを見出したのだろうか。本研究では、3クラス67名の日本人大学1年生を対象とし、合計41回の技能統合型授業の後に楽しさとストラテジー使用に関するアンケートを実施した。また、FLEや習熟度と正の相関が報告されている感情知能（Emotional Intelligence: EI）のアンケートを1回実施した。本発表では、(1)上記3要因間の相関関係、(2)クラス別FLEとストラテジー使用の41回にわたる推移、(3)学習者別FLEの41回にわたる推移と授業内容・学生の自由記述コメントとの関連について報告する。</p>	

8月7日(土) 第3室 ⑥15:05-15:30

タイトル	中学校英語学習者における動機づけと学習意欲減退に関する実証研究
発表者	西田理恵子
所属	大阪大学
アブストラクト	
<p>本研究では、2019年度に中学校1年生から3年生の388名を対象に、動機づけと学習意欲減退要因に関する質問紙調査を行っているため結果を報告する。質問紙には、自己決定理論を基盤とした内発的動機づけ・外発的動機づけ・無動機と学習意欲減退要因（興味の欠如・教師・内容・失敗の経験）に関して調査を行った。結果として、中学校1年生から3年生にかけて内発的動機づけと外発的動機づけの中でも取入的調整が高く、無動機や学習意欲減退要因が低い傾向にあることが明らかになった。相関分析では強い正の相関関係が、内発的動機づけと外発的動機づけ、無動機と学習意欲減退要因、学習意欲減退要因の要因間に見られた。またクラスター分析で異なる群の特徴を捉えたところ、高動機づけ群は学習意欲減退要因もにくく、低動機づけ群は学習意欲減退要因や無動機が高く、その間に中間群が存在することを明らかにした。本発表では、研究結果の詳細について報告を行う。</p>	

8月7日（土） 第4室 ④13:55-14:20

タイトル	英文要約が英作文の結束性に与える影響
発表者	丹藤永也
所属	青森公立大学
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、英文要約が英作文の結束性にどのような影響を与えるかを検証することである。結束性は結束装置によって形成され、文法的結束性（指示、代用、省略、接続）と語彙的結束性があり、一貫したテキストの構築に不可欠なものである。一方、要約は要点を簡潔に大局的な一貫性を持ってまとめたもので、全体の統合を図るために結束性が大きく関わる。そこで本研究では、大学生対象に英検準2級の読解問題を使って5回の英文要約課題を課し、その効果を検証するために前後で英作文を実施した。英作文は①Nakanishi（2006）のEFL Composition Profileを用いて採点し結果を比較、②文法的結束性と語彙的結束性については使用頻度とテキスト分析ツールCoh-Metrixの指標を活用して比較した。これらの結果から、英文要約は英作文の結束性の質を高める効果があるという示唆が得られた。</p>	

8月7日（土） 第4室 ⑤14:30-14:55

タイトル	高校生は英作文で複雑な名詞句を使うようになるか？：1年間の縦断研究
発表者	伊藤泰子, 加藤嘉津枝, 臼倉美里, 鈴木祐一
所属	神田外語大学, 日本大学, 東京学芸大学, 神奈川大学
アブストラクト	
<p>本研究は、日本人高校生の英語力の実態調査の一部であり、英語ライティングにおける名詞句の使用に着目した。約200名の高校生に1年を空けて同じテーマで2度ライティングをしてもらい、前置修飾（例：This book）、後置修飾・句（例：The girl reading a book）、後置修飾・節（例：The girl who is reading a book）の3つの種類の名詞句に関して1年間での変化を調べた。その結果、後置修飾・節については、誤った使い方を行っている場合が多いが使用回数が増えており、使おうと努力する傾向が見られた。それに対して、初級学習者に多く見られる前置修飾（This＋名詞）は、英語学習が進むにつれてその使用頻度が減り、他の名詞句が増えていくという結果が見られた。発表では、さらに詳しい分析の結果を示し、高校生のライティング指導への示唆などについて論じる。</p>	

8月7日(土) 第4室 ⑥15:05-15:30

タイトル	文脈を考慮することがランゲージングの質的内容に与える影響
発表者	市川裕理
所属	豊田工業高等専門学校
アブストラクト	
<p>ランゲージングは「言語について語ることで、意味を形成し、知識構築を行うプロセス」(Swain, 2006)を指し、言語に対する理解を深める活動として提唱されているものである。これを協働学習として英語授業に取り入れた場合、特に英語劇活動におけるランゲージングは、英文の正確性というよりも、伝えるためのより簡単でわかりやすい表現を探求する特徴があることがわかった(市川, 2020)。本研究は、学習者がどのように「伝えるための英語」についての理解を深め、知識構築を行っているかを、ランゲージングの中身を検証することで明らかにしたものである。グループで行われた話し合いを量的内容(やりとり数、トピック数)と質的内容(トピックの内容、知識構築の有無など)から精査した結果、英語劇という文脈を学習者が意識することが、理解を深め、知識構築がなされるやりとりを生起することに強い関連が見られることがわかった。</p>	

8月7日(土) 第5室 ④13:55-14:20

タイトル	読解教示が日本人中学生の英文読解に与える影響
発表者	前田宏美
所属	昭和女子大学大学院生
アブストラクト	
<p>本研究は、日本人初級英語学習者(57名)を対象に、教師による読解教示が学習者の英文読解にどのような影響を与えるか読解プロセスと読解の深さにより調査することを目的とする。実験参加者は、英検3級の2つの英文を(1)統制条件(自由に読む)と(2)タスク条件(批評教示:筆者の意図や書かれた内容について自分の意見を述べる)で思考発話法により読解した後、筆記再生課題に取り組んだ。思考発話プロトコルはHoriba(2013)に基づいて分析し、筆記再生はCarrell(1985)によるアイデア・ユニット(IU)を用いて分析を行った。筆記再生において、実験参加者はタスク条件でより多くIUを再生していた。思考発話法では、統制条件・タスク条件共に、語や文の分析に80%以上を占めていたが、タスク条件において、推論や自己モニタリングが増加し、読解教示によって異なる影響を与えることがわかった。本研究により、教師による読解教示は中学生の読解に影響を与えることが示唆された。</p>	

8月7日(土) 第5室 ⑤14:30-14:55

タイトル	物語文読解における旧情報の提示順序が日本人英語学習者の理解に与える影響
発表者	西聖
所属	筑波大学大学院生
アブストラクト	
<p>物語文中でこれまでに述べられてきた内容が修正されたために古くなってしまった旧情報は、読み手の理解を阻害する可能性がある。母語話者による読解では旧情報の量や質が理解に影響することが明らかになっているが(Guéraud et al., 2005; Kendeou et al., 2013), その提示順序が理解に与える影響を明らかにした研究は少ない。そこで本研究では、物語文における旧情報の提示順序が理解に与える影響を調査した。具体的には、①一貫、②矛盾、③修正ファースト(3文からなる旧情報を1文の修正情報よりも後に提示)、④修正セカンド(3文からなる旧情報を1文の修正情報よりも前に提示)の4条件のいずれかを精緻化文に持つ16つの実験テキストを日本人大学生・大学院生に自分のペースで読解してもらい、目標文の読解時間を計測した。分析の結果、教育現場における旧情報の明示的な指導の必要性が明らかになった。</p>	

8月7日(土) 第5室 ⑥15:05-15:30

タイトル	読解教示が物語文の時間・空間・登場人物に関する情報のつながりの理解に与える影響—矛盾検知と思考発話プロトコルの分析から—
発表者	卯城祐司, 小室竜也, 小木曾智子, 名畑目真吾, 江田博之, 工藤大奈, 丹藤慧也, 三上洋介, 水書亮
所属	筑波大学, 筑波大学大学院生, 筑波大学大学院生, 筑波大学, 筑波大学大学院生, 筑波大学大学院生, 筑波大学大学院生, 筑波大学大学院生, 筑波大学大学院生
アブストラクト	
<p>物語文読解において、読み手は出来事や登場人物の行動などの複数の情報（状況的次元）から、つながりを理解する必要がある。本研究は、読解中に情景をイメージして読んでもらう「教示」が、時間（時系列・順番）、空間（位置関係）、登場人物（特徴と行動）に関するつながりの一貫した理解に影響を与えるかを検証した。つながりを理解しているか検証するため、各次元に関して後半（例. 太郎が電車を降りた時花子はすでに待っていた）と前半が一致／不一致（[花子/太郎]は[太郎/花子]よりも20分早く着いていた）となる英文を実験材料とした。実験では、日本人英語学習者にPC上で英文を提示し、イメージ教示あるいは統制条件下で英文を読んでもらった。読解中に考えていることを発話してもらい思考発話法や、矛盾に気づいたかどうかを読解後に確認する課題を実施した。分析の結果、各次元におけるつながりの理解や教示の影響について示唆が得られた。</p>	

8月7日（土） 第6室 ④13:55-14:20

タイトル	読解速度に影響する速読教材の要因 —語彙頻度レベルと英文の長さに注目して—
発表者	田中菜採
所属	日本大学
アブストラクト	
<p>英文を理解しながらなるべく速く読む速読活動は、読みの正確さと速度を両立し、英文読解能力を上達させる効果が期待される。英文の読解速度に影響を与える要因として、読み手の英文読解熟達度・読解の目的・英文の読みやすさ等がある。特に英文の読みやすさは読解速度に強く影響するため、速読教材では英文に使われている語彙頻度レベルや英文の長さ（総語数）などの読みやすさが調整された段階別の英文が作成されている (Nation, 2009)。ただ、これらの教材が学習者の読解速度にどの程度影響を与えるかを検証した研究は少ない。</p> <p>本研究では、難易度が明示されている複数の速読教材を用いて、その教材の読みやすさが英文読解速度にどのように影響するかを検証する。日本人英語学習者を対象に、予め読みやすさを分析した速読教材の英文を用いて、その読解速度と内容理解度を記録した。読みやすさによる影響を比較し、また個人によってその傾向は異なるかを考察した。</p>	

8月7日（土） 第6室 ⑤14:30-14:55

タイトル	英文読解における処理負荷と文章の言語的特徴の関係—眼球運動測定を用いた検証—
発表者	名畑目真吾
所属	筑波大学
アブストラクト	
<p>先行研究では、語彙頻度などに基づく文章の読みやすさの指標により、英文読解にどの程度の認知的労力を要するか（処理負荷）を予測することは可能であるものの、その精度は十分ではないことが指摘されている (Nahatame, in press)。そこで本研究では、読みやすさの予測の向上に示唆を与えるため、読解中の眼球運動に反映される処理負荷と文章の言語的特徴の関係を個別に検討し、英文読解における処理負荷が特にどのような言語的特徴によって予測され得るかを明らかにすることを目的とした。大学（院）生 45 名が短い英文を読んだ際の注視時間や読み戻り・読み飛ばしなどのデータを収集し、それらを文章の言語的特徴の指標によって予測する統計モデルを構築した。その結果、眼球運動データは単語の多義性や文章のまとまり（結束性）に関する特徴など、既存の読みやすさの公式に含まれていない特徴によってより高い精度で予測されることが示された。</p>	

8月7日(土) 第6室 ⑥15:05-15:30

タイトル	英語の絵本を多読で活用するためのリーダビリティ調査 —コールデコット賞作品を対象に—
発表者	藤井数馬
所属	長岡技術科学大学
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、英語の絵本を多読指導に有効に取り入れるための基礎研究として、そのリーダビリティを Lexile と YL を使って調査することである。</p> <p>本研究では、1938年から2019年までのコールデコット賞受賞作品、オナー賞受賞作品合計346冊を対象にして、それらの Lexile 値を「Find a Book」というサーチエンジンを使い調査した。調査した346冊中、214冊(61.8%)の Lexile 値を得た後で、先行研究で作成した「YL = Lexile 換算表」を用いて、調査した Lexile 値から YL 換算値を算出した。</p> <p>この調査の結果、コールデコット賞受賞作品の YL 換算平均値は2.8であり、YL 2.0～3.6に多くの絵本が位置づけられ、多読の中期以降で用いるレベルが多いことがわかった。コールデコット賞作品は、GR や LR にはない内容の深さや、英文やイラストの美しさを持ち、多読の楽しみを味わわせる点で大きな可能性がある。その特長を生かすためにも、自ら選書する多読における初期段階では指導者の図書選定が必要であることが示された。</p>	

8月7日(土) 第7室 ④13:55-14:20

タイトル	英語イマージョン教育を受ける日本人中学生の音韻処理能力の発達：非単語復唱課題に基づく縦断的研究
発表者	清水真紀, 土方裕子
所属	群馬大学, 筑波大学
アブストラクト	
<p>英語に類似した綴りや発音を有する非単語復唱課題は、学習者の音韻処理能力の測定に使われてきた (e.g., Scheidnes, 2020)。しかし日本の英語イマージョン教育を対象にした研究や音韻処理能力を縦断的に調べた研究は極めて少ない。本研究は、英語イマージョン教育を受ける日本人中学生の音韻処理能力の発達を調べた。協力者は中学生 79 名で、うち 24 名は 2 年度、16 名は 3 年度に渡り同一の非単語復唱課題を受験した。またイマージョン教育を受けていない日本人大学生 27 名も同じ課題を行った。主な結果は次の通りである。第一に、中学生の音韻処理能力は大学生よりも高かった。第二に、非単語復唱の成績は音節数が少ない項目ほど高かった。第三に、中学生の非単語復唱の成績は 1 年ないしは 2 年で有意に向上したが音節数別の変化の傾向は変わらなかった。以上の結果を音韻認識やイマージョン教育の効果という観点から論じる。</p>	

8月7日(土) 第7室 ⑤14:30-14:55

タイトル	日本人英語学習者の英作文における後置修飾を含む名詞句の産出：学習者コーパスを用いた研究
発表者	田中広宣
所属	東京大学大学院生
アブストラクト	
<p>日本人英語学習者にとって後置修飾を含む名詞句の産出は難しく、過去の研究では特に関係節の産出が注目を浴びてきたが、関係節以外の後置修飾の産出について調べた研究はほとんどない。そこで本研究は、日本人英語学習者の後置修飾を含む名詞句の産出傾向を明らかにすることを目的とした。NICER1.3.2 (杉浦, 2020) という学習者コーパスを用いて、英語習熟度の異なる日本人英語学習者の英作文において、to 不定詞句・分詞句・関係節による後置修飾を含む名詞句がどの程度産出されているかを分析した。分析の結果、(1)to 不定詞句や関係節による後置修飾は、初級レベルの学習者でも産出が可能であるが、習熟度が上がるにつれて正確な産出の割合が増加する、(2)分詞句による後置修飾は、どの習熟度の学習者もほとんど産出しない、(3)分詞句を産出している学習者は不定詞句や関係節も産出している場合が多い、という傾向が明らかになった。</p>	

8月7日(土) 第7室 ⑥15:05-15:30

タイトル	英語の定冠詞選択における「一般・特定」の役割分析
発表者	高橋俊章
所属	山口大学
アブストラクト	
<p>英語母語話者の児童の場合、「唯一性」の区別を習得するまでの間、「一般・特定」の判断基準を用いて、冠詞の基本的システムを正確に使用している。本研究では、英語母語話者の児童の場合と同じように、日本人英語学習者についても「唯一性」を習得する前の段階においては、「一般・特定」の判断基準を用いて冠詞の選択を行っている可能性について調査を行う。具体的には、日本人 EFL 学習者のコーパスデータを元に分析し、学習者の言語能力レベル別に、可算名詞・不可算名詞（抽象名詞）の場合における冠詞使用を分析する。その分析においては、唯一性の判断が難しい場合でも、一般的な意味で指示対象物を指示している場合には、一般・特定の判断が利用できるため、そうでない場合より定冠詞使用の正確性が高いことを示す。</p>	

8月7日（土） 第8室 ④13:55-14:20

タイトル	小学校外国語（英語）指導者向けのポートフォリオを教職課程履修生に使わせた試み—英語力と語りかけ方の養成と外国語学習支援活動指導—
発表者	山口高領, 藤井佐代子
所属	秀明大学, 中国学園大学
アブストラクト	
<p>本事例報告では、科研費研究を通じて開発された、小学校における外国語（英語）指導者向けのポートフォリオを、教職課程の授業および地域の小学校での外国語学習支援活動の際に、授業や支援活動での学びを深め、省察を深めることを目的として使用した指導の事例を報告する。養成課程では、授業実践に必要な英語力と、語りかけ方の指導技術、さらには、児童との信頼関係を構築する力の養成が必要である。小学校非常勤講師として外国語活動・外国語科を指導してきた、ある大学教員が、ポートフォリオを活用しながら、英語力と語りかけ方をどのように指導し、また見直していったかを報告する。また、ある大学では、小学校教員を志望する教職課程履修生が、ボランティアでの外国語学習支援活動を近隣の小学校で行っている。この活動に取り組む履修生に対して、大学教員がポートフォリオを使用しながら、どのように支援の指導を行っているかについても報告する。</p>	

8月7日（土） 第8室 ⑤14:30-14:55

タイトル	小学校外国語模擬授業実践の KPT 3 観点のリフレクションと JPOSTL エレメンタリーを導入による成長
発表者	安達理恵
所属	相山女学園大学
アブストラクト	
<p>教職課程の学生には、コロナ禍でも可能な範囲で教育者としての指導力と、外国語科の場合は外国語の指導力の向上も求められる。発表では、2020 年度後期に開講した小学校で外国語を担当する指導者育成を目指した「外国語の指導法」授業において、学生の模擬授業実践後の振り返りに焦点を当てて報告をする。模擬授業の指導案では小学校教員としてのリフレクションツール「JPOSTL エレメンタリー」を導入し、学生に振り返りでは <b>Keep・Problem・Try</b> の 3 観点でのリフレクションを、エレメンタリーの中から自分で選んだ複数の記述文を意識しながら書くように指示した。その内容を KH コーダによるテキストマイニング分析した結果、外国語の授業に対する意識の変化や、また望ましい指導の在り方について具体的に理解を深めた様子などが確認でき、指導者としての成長も伺われた。発表ではこれらの結果について考察を加えて報告する。</p>	

8月7日(土) 第8室 ⑥15:05-15:30

タイトル	How ALTs' Teacher Agency Are Achieved in Professional Development
発表者	王林鋒
所属	福井大学
アブストラクト	
<p>This study aims to explore how ALTs enhance professional development through enacting teacher agency within a school-based teacher education program in a local context in Japan. The school-based teacher education program adopts collaborative reflection-oriented inquiry approach. Three ALTs are enrolled as formal graduate students in the program. In parallel with the program curriculum, the university faculty supports ALTs and their schools by regularly participating in their school-based lesson study meetings and teachers' research meetings. Seeking for a new approach to integrate research and practice, the program aims to help ALTs to enhance professionalism and practical competence. It is argued that in attempting to theorize daily practices through longitudinal and collaborative reflection, ALTs' professional development could be demonstrated by enacting teacher agency. By analyzing their monthly reflective writings, this paper explores how three ALTs at different school levels enacted agency to enhance their professional development through a longitudinal process of reflective practices. The findings show that institutional arrangements play a significant and critical role in developing professionalism and enacting agency.</p>	

8月7日(土) 第9室 ④13:55-14:20

タイトル	語彙習得における宿題の効果 日本人スペイン語学習者の動機づけと学習ストラテジーの関連性について
発表者	並里あけみ, 中島叶葉, 神谷信廣
所属	群馬県立女子大学学生, 群馬県立女子大学学生, 群馬県立女子大学
アブストラクト	
<p>本研究では、宿題の量と難易度のL3としてスペイン語を学ぶ日本人学習者の語彙習得、意欲、学習戦略への影響について調べた。</p> <p>L1日本語 L2英語とする参加者を集め、宿題の量と難易度で4つのグループに分けた。初級スペイン語オンラインプログラムを受講し、プログラム後に語彙テストを行い、語彙習得率を測った。</p> <p>その後 SRCvoc と SILL を用い語彙習得率と学習戦略との関係も調査した。</p> <p>又プログラムの前後にインタビューを行い、学習者の宿題による意欲を測った。</p> <p>語彙テストの分析では宿題の量が少ない群の学習者はいい成績を残したが、量が多く難しい群はそうではなかった。</p> <p>学習戦略の使用量・種類は宿題との関係は薄く、スペイン語を学ぶ時の方が使用量・種類ともに大きかった。</p> <p>更に学習への一番ストレス耐性が高く、意欲的だったのは宿題の量が少ない群であった。</p> <p>即ち教師は宿題の量や難易度を考慮し宿題が果たす役割を再度見直す必要がある。</p>	

8月7日(土) 第9室 ⑤14:30-14:55

タイトル	中学生による「英語狂言」の有効性
発表者	青柳有季
所属	東京学芸大学附属小金井中学校
アブストラクト	
<p>新学習指導要領の教材の留意事項には、「日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとする」よう記述されている。筆者は、日本の伝統文化である「狂言」を取り入れた「英語狂言」のドラマ活動を2013年度から中学2年生を対象に実施してきた。そして12回の授業のゴールとして20分の作品を創作し、4回の舞台(外国人を対象としたものを含む)を目指してきた。この「英語狂言」の実際と有効性について紹介したい。</p>	

8月7日(土) 第9室 ⑥15:05-15:30

タイトル	発信語彙の定着を促す ICT 教材 —EasyConc for FlashCard.fmp12 と BingoSheet for FlashCard.xlsx の開発と活用
発表者	日臺滋之
所属	玉川大学
アブストラクト	
<p>パフォーマンステスト後に振り返りとして、中学生、高校生に英語で言いたかった表現を日本語で書いてもらい、それを後で英語母語話者とで英語に直し、日本語表現と英語表現が対応する日英パラレル・コーパス EasyConc (Windows 用、iOS 用) を開発した。この EasyConc の日本語部分から日本語頻出語彙リストを作成した。また、英語部分から n-gram 分析で、チャンクごとに英語表現頻出リストを作成した。この日本語リストと英語リストをもとに、発信語彙を拾い出し iPhone と iPad 用の EasyConc for FlashCard.fmp12 を開発した。このソフトウェアの英語部分は英語の読み上げが可能で、学習者は語彙の新規登録もできる。また、BingoSheet for FlashCard.xlsx として、EasyConc for FlashCard.fmp12 の日本語とその英語表現を使い、Excel 上で、語彙を選択するだけで自動的に Bingo シートを作成できるソフトウェアを開発した。開発したソフトウェアは、学習者が発信語彙を習得するうえで利用価値の高い ICT 教材であり、本発表では作成過程と使用方法、帯活動での活用について述べたい。</p>	

8月7日(土) 第10室 ④13:55-14:20

タイトル	英検難易度に基づく多義前置詞 in, on, at の語義分布と出現頻度
発表者	南部匡彦
所属	国際短期大学
アブストラクト	
<p>学校英語教育の初期段階で提示される前置詞 in, on, at は学習者にとって馴染みが深い。しかしこれらの前置詞の中核的意味は空間位相領域でまず構成され、そこから時間的領域、そして抽象領域へと意味拡張がなされるため、学習者にとってはその語義の広がりをもたらす多義性が習得の困難さの要因となる。そこで本研究では、英検の難易度によって多義前置詞の持つどの語義が漸次的に出現するかを調査し、教育的観点からどの順番で語義を学ぶべきかを明らかにした。具体的手順として、英検7グレード(1~5級)各10回分の本文・質問文に基づくコーパスを対象に、Dirven(1993)の多義前置詞の意味機能カテゴリを用いて分析対象の前置詞5,118語にコーディングを行った。意味領域別に分析を行った結果、英検の各グレードにより前置詞の出現頻度・語義分布には統計的に有意な隔りがあり、前置詞を含む句・句動詞が難易度の上昇とともに一定の割合を占めることが明らかになった。</p>	

8月7日(土) 第10室 ⑤14:30-14:55

タイトル	説明文の Narrow Reading による付随的語彙学習～異なる語彙領域と遭遇頻度の観点から～
発表者	三上洋介
所属	筑波大学大学院生
アブストラクト	
<p>EFL 環境下では理解可能なインプットの量が限定的である。インプット量を増やす方法の一つに Graded Readers(GR)を用いた多読があるが、特に複数の関連した GR を読む Narrow Reading(NR) は、認知負荷軽減による理解度向上や特定語の遭遇頻度上昇による語彙習得の促進をもたらす (Krashen, 1981)。しかし物語文 NR に比べ、専門用語の多い説明文 NR による語彙学習研究はまだ限定的である。本研究では日本人高校生 42 名に対し説明文 NR による付随的語彙学習効果を検証した。説明文 GR3 冊の NR を行い、目標語に対する異なる遭遇頻度と語彙領域の再生・再認識を測定した結果、説明文 NR の付随的語彙学習に対する示唆が得られた。</p>	

8月7日(土) 第10室 ⑥15:05-15:30

タイトル	大学生英語学習者の検索行動 — 語彙問題の場合、読解問題の場合
発表者	小山敏子
所属	大阪大谷大学
アブストラクト	
<p>大学生のスマートフォン（以下、スマホ）所有率がほぼ100%である昨今では、彼らが英語の授業に電子辞書を持参しないことは珍しいことではなくなった。高等学校の英語授業では電子辞書を使っていた彼らも、常に携帯しているスマホさえあれば、事足りると考えているように見受けられる。</p> <p>では、実際にスマホを使った検索行動が、彼らにとっての必要な情報を提供できているのだろうか。また、どのような場合にスマホで検索しようとするのだろうか。</p> <p>本調査では、健康スポーツ科学系に所属する1回生48名に、語彙文法問題と英文読解問題、それぞれに取り組んでもらい、1) どちらの問題での検索行動が多かったか、2) 検索語数と正答率との関係、また、3) 実際に使用したアプリなどを調べてみた。</p>	

8月7日（土） 第11室 ④13:55-14:20

タイトル	学生の自己調整学習力の向上を意図した指導の効果
発表者	土屋麻衣子
所属	福岡工業大学
アブストラクト	
<p>本発表は、学生が自己調整をしながらより自発的に学習に従事するようになることを意図し実施した指導の効果に関するものである。3名の教員の指導が学生の自己調整学習の促進にどのような影響を及ぼしたのか、自己調整学習尺度を基にしたアンケートを実施し分析を行った。また、教師が自己調整学習の促進のために行った指導法を学生がどのように捉えていたかについてもアンケートを実施した。前者のアンケート結果においては統計的に有意な差は確認されなかったが、後者のアンケートについては興味深い違いが見受けられた。学期末の英語テストの結果も合わせて報告する。</p>	

8月7日（土） 第11室 ⑤14:30-14:55

タイトル	SDGsに主眼を置いた英語 CLIL 授業における学習者の変容
発表者	工藤泰三
所属	名古屋学院大学
アブストラクト	
<p>2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に示された持続可能な開発目標（通称SDGs）の認知が広まるにつれ、貧困や飢餓、環境問題や社会の分断といった地球的課題への関心が日本社会でも高まってきている。筆者はこのような状況において、英語教育が持続可能な開発に寄与する方法として、内容言語統合型学習（CLIL）のアプローチを用いて地球的課題を扱う英語授業の実践を続けている。本発表では、筆者が大学生を対象に2020年度に行ったSDGsに主眼を置く授業実践において、観察された学習者の英語力および地球市民意識（グローバル・シティズンシップ）の変容について報告するとともに、さらなる英語力の伸長を実現し、かつ地球的課題に主体性をもって考察・行動できる人材を育てるために今後取り組むべき課題について検討したい。</p>	

8月7日(土) 第11室 ⑥15:05-15:30

タイトル	Effects of the Use of AWE as Feedback to EFL Learners on Their Writing Development
発表者	石塚博規, 姚坤玥
所属	北海道教育大学, 北海道教育大学大学院生
アブストラクト	
<p>The purpose of this research is to explore the effects of delivering two different kinds of feedback in writing tasks, teacher feedback and feedback from automated writing evaluation system (AWE) called Pigai to Chinese high school students. A pre-post experimental design with three groups was adopted. Data were obtained through pre-test, post-test, weekly writing samples with attached feedback from 51 first-year Chinese high school students and one English teacher. Group A exclusively received feedback from their teacher; Group B received both teacher feedback and AWE feedback; Group C students exclusively received AWE feedback. The quantitative data were analyzed using the Kruskal-Wallis test. The finding revealed that there was a statistical difference between Group B and Group C in terms of the number of prepositional errors between the pre-test and post-test. Mainly, Group B's average scores of three writings submitted during the experiment given by both the teacher and Pigai are higher than other two groups. Nearly 65% of Group B enhanced their writing fluency after the three-week experiment, while only around 30% of Group A and C improved their writing fluency. It was concluded that the combination of two different feedback somehow can increase students' writing accuracy and fluency. It was also found by comparing two different types of feedback that students' writings were affected by the teacher's subjective impression of students' handwriting. The teacher used coded annotations in order to encourage students to self-correct. On the other hand, AWE feedback pointed out the exact grammatical errors. In summary, the combination of teacher and AWE can be better able to provide objective and comprehensive feedback to students and enhance students' writing ability.</p>	

8月8日（日）

自由研究発表・事例報告

⑦09:10–09:35

⑧09:45–10:10

⑨10:20–10:45

⑩10:55–11:20

⑪11:30–11:55

⑫12:05–12:30

8月8日(日) 第1室 ⑦9:10-9:35

タイトル	英語学習者が求めるフィードバックとディスカッション経験の関係分析
発表者	松岡真由子, 大竹翔子, 水本武志, 森下美和
所属	追手門学院大学, 神戸学院大学, ハイラブル株式会社, 神戸学院大学
アブストラクト	
<p>本発表は、英語のオンラインディスカッション後に実施した質問紙調査の結果について、フィードバックの観点から分析をし報告するものである。大学1, 2年生計102名がグループディスカッションを行い、参加者のパフォーマンスが可視化されたフィードバックが参加者に提示された。振り返りとして参加者に回答を求めた質問紙調査の結果からは、オンラインディスカッションの経験が豊富な学生は、自分に必要なフィードバックについて理解している傾向が見られ、経験が少ない学生はより多くの種類のフィードバックを求める傾向が見られた。また、経験の量に関係なく個人の発話に対する即時的評価を求める一方で、教員からのフィードバックについては個人の発話に対する事後評価を望む傾向が見られた。さらに、グループ内の他者のパフォーマンスから、個人の英語力向上に加えて、個人発話量の増加や他者の考えの精緻化などを教訓として得たことが明らかとなった。</p>	

8月8日(日) 第1室 ⑧9:45-10:10

タイトル	オンライン上の英語ディスカッションに関する一考察：書き起こしデータをもとに
発表者	森下美和, 大竹翔子, 松岡真由子, 水本武志,
所属	神戸学院大学, 神戸学院大学, 追手門学院大学, ハイラブル株式会社
アブストラクト	
<p>英語科目の中でも特にスピーキングの授業は、対面授業がふさわしいものであると考えられるが、2020年度はコロナ禍により多くの大学でオンライン授業を余儀なくされた。Zoomでは、ブレイクアウトルームに分かれてのグループディスカッションも可能であるが、教室と違って全体を把握することが難しいため、各ブレイクアウトルーム内で沈黙が続いたり、日本語が話されている可能性も否めない。そこで、発表者たちはやり取りの量などのデータをリアルタイムで分析できるオンライン会議ツール Hylable を使用し、個人の貢献度をその場で確認したり、必要に応じてフィードバックを与えることを試みた。また、ディスカッションの自動および手動での書き起こしデータを確認してみたところ、雑談しているだけのグループ、準備した英文を順に読み上げているだけのグループ、英語でディスカッションがしっかりできているグループのおおむね3種類が存在することが分かった。</p>	

8月8日(日) 第1室 ⑨10:20-10:45

タイトル	図画工作を活用した小学校 CLIL の可能性について—イタリアの事例を中心として—
発表者	二五義博
所属	海上保安大学校
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、図画工作の内容を取り入れた活動がいかに言語使用に結び付き、思考力を高める場を提供し、協学により児童が主体となる学びへ発展するかを検討することである。研究方法としては、イタリアにおける CLIL 授業の観察を中心として、日本の授業事例との比較考察も意識しながら、主に CLIL の 4C の観点から分析する。例えば、イタリアにおいては、古代ギリシャやローマの事例も参考にしながら環境にやさしい家のモデルを考えて作り、次に家の各部について英語で詳細に説明し、最後にはクイズを出し合う授業が行われた。研究結果、ものの製作過程あるいは完成品に関して英語を使うことで、児童は具体性を多重知能 (MI) で実感しながら、オーセンティックな状況の中で英語を使用できた。また、言語習得のみならず、学習者は古代の家に関する知識も獲得できた。さらには、環境にやさしい家具や庭の配置、クイズを英語で考える中で児童の思考力が高められた。</p>	

8月8日(日) 第1室 ⑩10:55-11:20

タイトル	「書くこと」学習前の児童による英語の手書き文字
発表者	伊東哲, 岩田伊玄
所属	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科, 長野市立吉田小学校
アブストラクト	
<p>令和2年4月より全面実施となった学習指導要領の小学校外国語科にて、「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする」とされた。またその解説では、指導上の留意点として、「児童の実態に応じて一度に取り扱う文字の数や種類に配慮する」ことや、「「書くこと」の活動は教師が想像する以上に時間がかかる場合がある。授業においては十分な時間を確保するとともに、四線上に正しく書くことができるようにする」ことなどを挙げている。これらを踏まえると、5年生の本格的な「書くこと」の学習に入る前に、外国語活動やその他教科の学習を通して、児童がどのような文字を既に書くことができるのかを明らかにすることは、限られた授業時間の中で効率的に指導するうえで重要である。本発表では、ある公立小学校5年生のクラスを対象として2021年5月に実施した聴写課題を分析した結果について発表する。</p>	

8月8日(日) 第1室 ⑪11:30-11:55

タイトル	デジタル教科書と教科書に準拠したワークシートを活用した小学校外国語科における「主体的な学び」の指導と評価
発表者	高橋美由紀, 山内優佳, 柳善和
所属	鈴鹿大学, 広島大学, 名古屋学院大学
アブストラクト	
<p>小学校外国語科における「主体的な学び」では、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設けることが必要である（文部科学省 2018）。場面設定として、ICT を活用して、コミュニケーションを行う場면을シミュレーションすることが可能となる（柳 2011）。一方、評価方法の多様な工夫として、ワークシートの活用が挙げられている（文部科学省 2020）が、ワークシートは練習ドリルとしての要素や「知識・技能」の評価として使用度が高い。</p> <p>本発表では、ICT としてのデジタル教科書、及び教科書に準拠したワークシートを活用して、「主体的な学び」につながる指導法について提案する。また、『指導と評価の一体化』に示される事例を基にして、読むこと・書くことについて「主体的な学び」への評価をするための提案をし、実際に小学校で行ったパイロットスタディについて述べる。</p>	

8月8日(日) 第1室 ⑫12:05-12:30

タイトル	小学校英語における読むこと・書くことへの接続 —検定教科書に基づく頻度分析を通して
発表者	星野由子, 清水遥
所属	千葉大学, 東北学院大学
アブストラクト	
<p>令和二年度から実施された小学校学習指導要領の外国語では、読むこと・書くこと両方において、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味を理解すること、書き写すこと、書くことが求められている。本研究では、児童が2語以上の表現を読んだり書いたりするまでに、教科書がどの程度その表現を聞いたり見たりする機会を設けているのかを調査した。令和二年度版小学校英語教科書全7社に関して、読む活動については音声を聞かずに読んで理解する活動で使われている表現を分析した。また、書く活動については文を完成させたり自分で文を作る活動において児童が書くこと期待されている表現について分析を行なった。その結果、児童が読んだり書いたりする前に、“I like” や “I want to” のような表現には多く遭遇する一方で、遭遇回数が5回未満の表現もあるなど、全体的な遭遇回数には大きなばらつきがあることが判明した。</p>	

8月8日(日) 第2室 ⑦9:10-9:35

タイトル	小学校外国語の評価について 話すこと【やり取り】思考力・判断力・表現力の評価に寄せて
発表者	矢野司
所属	安曇野市立豊科北小学校
アブストラクト	
<p>小学校外国語の教科化に伴い、「思考・判断・表現」の具体的な評価方法について、適切に評価できているか不安の声を聞くことが多い。そこで、本研究では、話すこと【やり取り】の場面で、学年職員で話し合いながら、どのように学習をすすめ、評価に至ったのか、その過程を報告する。</p> <p>【やり取り】の場面において、小学6年生を対象に「中学校で楽しみたいことについて友と英語でもりあがる」という単元目標を設定した。実施時期は、令和3年2月であり、全8回指導を行った。話すこと【やり取り】思考力・判断力・表現力の「評価」をするために、やり取りの質に着目して、内容面に関連させたやり取りの回数で評価することを職員間で共有し合った。また、教師が一時間の授業の中で児童のやり取りを評価するために、対話する相手が重ならず循環させていくローテーショントークを使い、思考力・判断力・表現力を評価することで、その成果や課題について検証する。</p>	

8月8日(日) 第2室 ⑧9:45-10:10

タイトル	Computer の特性を活かした英語学力評価問題の開発に関する調査—情報を読み取って自分の意見を書くプロセスの評価事例
発表者	新美德康, 松浦伸和
所属	広島大学大学院, 広島大学
アブストラクト	
<p>世界的に学力評価の方法は紙ベースの試験(PBT)からコンピュータ使用型試験(CBT)に移行しており、我が国でも全国学力調査の CBT 化が検討されている。CBT は PBT と異なり、解答順序の制御や解答ログの取得が可能になるため、受験者の問題解決プロセスを把握できる可能性がある。しかし、英語科で CBT をどのようにデザインしどのような評価が可能になるのかまったく検討されていない。そこで、本研究では、CBT の特性を活かして「ある言語活動で働く思考プロセスに沿った連続的な出題」を検討し、言語産出のみの評価に加え、産出に至るプロセスの評価によってどの程度評価が精密になり受験者を分類できるのかを検証した。情報を読み取って自分の意見を書く力を評価する CBT 問題を試作し、ある公立中学校第3学年1クラスを対象に調査を行った。本発表では、調査結果を示すとともに、CBT だからこそ可能になる出題・評価方法を考察する。</p>	

8月8日(日) 第2室 ⑨10:20-10:45

タイトル	全国学力調査の分析結果から見られる中学生の学力実態
発表者	松浦伸和
所属	広島大学
アブストラクト	
<p>一昨年の4月に全国約100万人を対象として全国学力・学習状況調査が実施された。その調査は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」の4技能について、学習指導要領で求められている「基礎的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を図ることを目的としている。問題ごとの得点や解答類型などの調査結果は報告書にまとめられ、オンライン上で閲覧可能である。本発表では、解答をより詳細に分析した結果から中学生の学力実態を報告する。全体の傾向に加えて、英語学力の構成要素間の相関を算出した。問題間の相関のみならず、技能間、知識・技能と思考力等の相関、他教科との相関など幅広く分析して学力実態を考察した。</p> <p>さらには、それぞれの技能について「基礎的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」に分けた得点を基に、クラスター分析によって生徒のグルーピングを試みた結果を発表する。</p>	

8月8日(日) 第2室 ⑩10:55-11:20

Zoomの部屋番号：	
タイトル	VELC Test Onlineを使用したオンラインプレイズメントテストの試み
発表者	横内裕一郎
所属	弘前大学
アブストラクト	
<p>本発表では、2021年4月に実施したVELC Test Onlineによるプレイズメントテストの結果が適切であるかを調査し、監督者のいない状況下で行われるテストでもクラス分けが適切に行われるかを検証した。さらにオンラインで実施するテストであることに起因する実施上の問題点を精査した。2021年実施のVELC Test Onlineの得点と大学入学共通テストの得点の相関分析を行った結果、合計点の相関は<math>r = .782</math>と、2018年度と2019年度に実施された従来のペーパー版VELC Testの得点とセンター試験の得点との相関係数（それぞれ<math>r = .767</math>, <math>r = .790</math>）と比較して大きな差が無いことが明らかになった。一方、受験に際して多数の障害があったことが報告されており、受験後に実施したアンケートの結果から、実施上機材やネットワークのトラブルがあった旨について複数の報告が寄せられた。この結果を受けて、オンラインでテストを実施する上での注意点について考察した。</p>	

8月8日(日) 第2室 ⑪11:30-11:55

Zoomの部屋番号:	
タイトル	学習者コーパスと産出評価: ICNALE GRA プロジェクトの狙い
発表者	石川慎一郎
所属	神戸大学
アブストラクト	
<p>近年, L2 作文や発話の評価研究が進んでいるが, その際に必要となるのは新規サンプルの質の判断基準となるアンカーサンプルである。筆者が構築しているアジア圏英語学習者コーパス ICNALE を含め, 学習者の習熟度を公開するコーパスはあるが, 収集した産出サンプル自体に対する信頼できる評価データを提供するのは少ない。そこで筆者は, アジア圏学習者による作文・発話各 140 本を抽出し, それらを母語・学歴・職業・性別を異にする 100 名(目標値)の国際評価チームに一斉に評価させ, 10 観点ルーブリックに基づく評価データを体系的に収集する ICNALE Global Rating Archive の構築を進めている。評価は ELF の観点から行われる。これまでに延べ 64 名(母語背景はフィリピン語・日本語・英語・タイ語・中国語・インドネシア語・マレー語・ラオ語・モン語・ウイグル語)のデータを収集した。発表では, このデータに基づき, 観点間の関係, 評価者間一致度, アンカー候補の言語特性について報告する。</p>	

8月8日(日) 第2室 ⑫12:05-12:30

Zoomの部屋番号:	
タイトル	談話完成タスクを用いた英語発話自動採点システムの構築
発表者	林裕子, 近藤悠介, 石井雄隆
所属	佐賀大学, 早稲田大学, 千葉大学
アブストラクト	
<p>外国語教育においてパフォーマンス評価が幅広く実践されている今日, 英語学習者の「話す」「書く」能力の直接評価については, 実施に伴う膨大な人的, 時間的コストや採点者間の信頼性の担保などの問題が生じ, 継続的な実施は決して容易ではない。本研究では, 自動採点研究の知見に基づき, 発話自動採点システムの構築に取り組んだ。英語によるコミュニケーション能力を測定すべく, 文脈や目的に応じた情報の理解と伝達が求められる DCT (Discourse Completion Task: 談話完成タスク)を, 大学生 (n = 238) を対象に CBT (Computer-Based Testing) の形式で実施した。本発表では, 使用した DCT 並びにルーブリックの概要を示し, 評定者 5 名による発話データの人手評価と自動評価の一致率をもとに本システムの予測精度を検証する。加えて, 本システムの実用化に向け, 使用した基準・予測変数の妥当性を検討する。</p>	

8月8日(日) 第3室 ⑦9:10-9:35

Zoomの部屋番号:	
タイトル	L2使用に関する自己効力感がL2 WTCに与える影響 —小学3年生の授業実践から—
発表者	物井尚子
所属	千葉大学
アブストラクト	
<p>2020年より公立小学校での英語教育が3年生より開始された。外国語活動の目標は「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」ことであり、その目標の一つとして「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことが掲げられている。本研究ではこの主体的な態度を <i>Willingness to Communicate (WTC)</i> と捉える。本研究では、小学3年生3クラス105名に5週にわたって英語の授業を行い、授業内の活動をもとに作成したL2使用に関する自己効力感を確認する振り返りシートとL2 WTCを測定する質問紙を実施し、その関係性を分析した。「できた」「わかった」という表現で示される、教室内での活動に沿った児童の自己効力感が教室という枠を超えたL2 WTCにどう作用するかについての影響を明らかにする。本発表では、①質問紙と振り返りシートの回答に関する相関分析の結果と②児童の振り返りシートの記述に関するテキスト分析結果を発表し、フロアと議論を深めたい。</p>	

8月8日(日) 第3室 ⑧9:45-10:10

タイトル	Japanese Junior High School Students' Attitudes Towards Challenges in English: A Perspective from the Self-Worth Theory
発表者	リースエイドリアン, 竹森徹士
所属	宮城教育大学, 宮城教育大学
アブストラクト	
<p>Despite the extensive literature related to motivation, and lack thereof, seen in the Japanese EFL classroom, very few studies have considered the reasons for Japanese students' apparent lack of enthusiasm from the perspective of the Self-Worth Theory. In this study, I aim to help fill this gap, by investigating the drive behind the way Japanese students of English react how they do when faced with challenging situations. In this qualitative study, I investigated the attitudes of 383 Japanese junior high school students towards studying English from the perspective of the Self-Worth Theory. Students were required to write three essays about how they would react under hypothetical circumstances in which their feelings of self-worth might be threatened. The contents of the students' essays were analyzed and matched with quadrants of Covington's (1992) Quadripolar Model of Achievement Motivation. Overall, the results suggested that the adolescents appeared to show traits of low defensive pessimism, high self-handicapping, and high helplessness, placing the students on the borderline Self-protectors and the Failure Acceptors. Reasons for the findings and pedagogical implications will be discussed.</p>	

8月8日(日) 第3室 ⑩10:20-10:45

タイトル	Impact of personality on motivation among Japanese learners of English
発表者	野村千尋, 菅原健太
所属	北海道教育大学院生, 北海道教育大学
アブストラクト	
<p>Personality is an influential characteristic affecting motivation in second language (L2) learning (Dörnyei &amp; Ryan, 2015). Previous studies (e.g., Ghapanchi et al., 2011) have identified relationships between the Big Five personality traits (McCrae &amp; Costa, 1985) and Dörnyei's (2005) L2 motivation self-system (L2 MSS). Extension and reconceptualization of the L2 MSS has been argued widely in L2 motivation research (Csizér, 2019). In addition to personality traits, psychological characteristics that may be associated with components of the L2 MSS are positive emotions (Teimouri, 2017) and persistence in L2 learning (Yun et al., 2018). Furthermore, reconceptualization of the L2 MSS has been proposed using the framework of student engagement (Dörnyei, 2019). However, links between the L2 MSS and the above personality and motivational domains have not been empirically validated. The purpose of this study was to explore these links to extend the L2 MSS and better understand the motivation of Japanese EFL learners. For this purpose, we generated the following research questions: RQ1) How are the Big Five personality traits of learners related to the components of L2 MSS and positive emotions?; RQ2) Are the behavioral characteristics of learners distinguishable in terms of their intended effort, persistence, and engagement with classroom work?; RQ3) How are the psychological domains of learners explored in RQ1 related to the behavioral characteristics explored in RQ2? To address these RQs, we collected data from university and high school students (N &gt;150) using multi-item scales. The collected numerical data were analyzed by exploratory factor analysis and correlation analysis.</p>	

8月8日(日) 第3室 ⑩10:55-11:20

タイトル	小学校教員と中学校教員の英語音声指導に対する意識の違いと指導に及ぼす要因
発表者	河合裕美, 高山芳樹
所属	神田外語大学, 東京学芸大学
アブストラクト	
<p>外国語授業を担当する小学校教員と中学校教員の英語音声指導における不安感・指導能力・英語能力に対する意識の差や音声指導の意識の要因の関係性について分析を試みた。教員研修等に参加した小学校教員約150名、中学校教員約150名に質問紙調査を実施した。因子分析によって、8因子(①英語力に対する不安 ②発音指導への意欲 ③自己の英語能力の自信 ④音声指導能力 ⑤授業中の児童生徒の意識への認知 ⑥発音の重要性に対する意識 ⑦音声・リテラシー指導の知識 ⑧指導者としての自信)が特定された。8因子を変数として2群を比較した結果、2グループとも因子②は高いが、小学校教員は因子①が中学校教員よりも有意に高く、因子④⑦⑧が中学校教員よりも有意に低い。一方、中学校教員は、発音指導の際にカタカナ使用に対して有意に小学校教員よりも肯定的であることが分かった。さらに相関分析や重回帰分析を施し、考察を試みた。</p>	

8月8日(日) 第3室 ⑪11:30-11:55

タイトル	リアルタイム・オンライン方式による英語音声指導の試み
発表者	大嶋秀樹
所属	滋賀大学
アブストラクト	
<p>本発表は、新型コロナウイルスの感染拡大の中、教室での対面方式に代えて実施した、リアルタイム・オンライン方式による英語音声指導についての実践事例報告である。受講者は、大学教員養成学部で将来の小・中・高等学校の英語担当教員を目指す学生で、発表では、リアルタイム・オンライン方式での英語音声指導の実践事例について、受講者の意識調査、音声評価から検証する。考察では、リアルタイム・オンライン方式による英語音声指導の結果を、従来の教室での対面方式による英語音声指導の結果と比較し論考する。</p>	

8月8日(日) 第3室 ⑫12:05-12:30

タイトル	認知言語学の知見に基づく英語前置詞の教授法とその教育効果に関する研究
発表者	藤原隆史
所属	松本大学
アブストラクト	
<p>英語の前置詞は、機能語に分類されることが多いが、その多義的性から多くの意味用法が認められる。例えば、旺文社の『ロイヤル英文法』は、前置詞 in に 10 個の意味用法を認めている。さらに、三省堂の『ウィズダム英和辞典』第三版では、17 個の意味用法が掲載されている。これらが意味するのは、前置詞の意味用法が膨大であり、英語学習者にとって非常に大きな負担を強いることになるということである。本研究では、前置詞 in を含む英語の前置詞を、1980 年代以降隆盛を極めている認知言語学の知見から説明することを通して、学習者の負担を軽減し、教育効果を高めることを目的とした教授法を考察することである。実際にその効果を確認するための実験を行い、認知言語学の知見を活かした教授法が、従来の教授法（暗記させる）と比べ、教育効果が高いことが確認された。本発表では、これについて報告する。</p>	

8月8日(日) 第4室 ⑦9:10-9:35

タイトル	遠隔授業と学習スタイルの関連性についての研究: 内向的な学習者はオンライン授業を好むのか?
発表者	若本夏美, 森川慧子, 金衿佳
所属	同志社女子大学, 同志社女子大学, 同志社女子大学
アブストラクト	
<p>2020年のパンデミックにより小学校から大学まで世界中の教育者たちは、授業形態を突然劇的に変えることを余儀なくされ、日本の大学も遠隔授業を実施せざるを得なかった。本研究は大学生が2020年の春学期における全ての授業を遠隔で経験しどのように認識したのか、また秋学期の対面授業と比較し遠隔授業の長所と短所について調査する。独自に設計した6段階のリッカート尺度と自由記述の質問からなる23項目のアンケートを英語英文学科128名の大学1年生に実施した。記述統計とケンドールの相関係数の結果、通学時間と遠隔授業を好む傾向には優位な相関関係は見られなかった。代わりに、個人又はグループ学習を好むという学習者のスタイルと遠隔授業を好むという傾向には優位な相関関係が見られた。これからの大学教育において対面授業と遠隔授業の融合は、学習者に寄り添った教育環境を提供するとともによりアクティブラーニングを促すために必要不可欠と考えられる。</p>	

8月8日(日) 第4室 ⑧9:45-10:10

タイトル	遠隔授業におけるオーラルプレゼンテーション活動の意義
発表者	峰松和子
所属	跡見学園女子大学
アブストラクト	
<p>遠隔授業におけるZoom使用のオーラルプレゼンテーション(以下OP)活動が大学生の学びにとってどのような意味があったのか、学生の視点から分析する。各個人が切り離された状況で、他者と意見や感想を共有し合うために、OP活動を授業に取り入れた。それにより、どのような学びがあったのかを量的質的アンケートから明らかにする。特に①準備段階での原稿づくり②OP活動後の英語力の伸びた点③英語学習の動機について焦点を当てた。その結果、OP活動を通して、「英語で話す力」、「英語で書く力」、次いで「英語で聞く力」「人にアピールする力」が伸びたと学生は評価。「他の人の発表を聞くことで、何等かの刺激や学びがあった」と多数が回答。OP活動を通して、相互交流を実現できたといえる。一方通行で行うオンディマンド型授業にはない意義があった。また、「人に英語で自分の考えや意見を伝える力をつけたい」という英語学習への動機が高まった。</p>	

8月8日(日) 第4室 ⑨10:20-10:45

タイトル	E-learningにおける自学自習の促進に向けたチャットの活用 ～教員による声掛けとピアサポート～
発表者	倉増泰弘, 東宮史, 柳本萌子, 関谷弘毅
所属	徳山工業高等専門学校, 徳山工業高等専門学校, 徳山工業高等専門学校, 広島女学院大学
アブストラクト	
<p>高専 A では、2021 年 5 月中旬から、本科 2、3 年生の 264 名を対象として、e-learning を用いた単語学習を実施している。本研究は、e-learning における自学自習促進の目的でチャットによる教育的支援（教員による声掛けおよびピアサポート）を行い、学習の進捗状況に好影響（異なる効果）が出るかを検証するものである。調査対象とする 2、3 年生を同学年・学科内で 4、5 人のグループに分け、グループおよび時期によって異なる支援を行っている。実験期を第 1～3 期（受講期間各 10 日間）とし、各期に 3 回ずつ報告日を設け、学生には Microsoft Office 365 の Forms を用いて 1 日の平均学習時間を報告してもらっている。本発表では、①教員による声掛け、②ピアサポート、③支援なしのうちいずれがより良い学習促進に寄与するかを考察するために、1) 学習時間、2) 習得単語数を主な従属変数とし、また受講前の診断テストのスコアを共変量とした共分散分析の結果について考察を行う。</p>	

8月8日(日) 第4室 ⑩10:55-11:20

タイトル	要約プロセスの明示的指導が日本人英語学習者の英文要約に与える影響 —自己調整学習サイクルを援用して—
発表者	丹藤慧也
所属	筑波大学大学院生
アブストラクト	
<p>日本人英語学習者の英文要約の特徴として、原文の抜き出し、必要情報の欠如、過度な簡略が多いこと等が指摘されている。そこで本研究では、読解指導で有効とされているメタ認知方略を含む、自己調整学習サイクル(Zimmerman et al., 1996)を援用した要約指導の効果を検証した。日本人大学生を対象に、事前調査（要約テスト・読解テスト・自己調整学習アンケート）の後、5回の要約指導を実施し、事前調査と事後調査及び遅延調査の結果を二元配置分散分析で分析した結果、要約テストが事前と事後及び遅延でそれぞれ有意に向上した。自己調整学習アンケートでは、不安、メタ認知方略使用、自己効力感において事前と事後及び遅延でそれぞれ有意な向上が見られた。読解テストでは有意な向上は見られなかった。以上のように、本研究から自己調整学習サイクルを援用した要約指導は要約能力の育成に効果があるという示唆が得られた。</p>	

8月8日(日) 第4室 ⑪11:30-11:55

タイトル	日本人就労者の英語使用頻度：ウェブ調査（2021年）の統計的補正による推計
発表者	寺沢拓敬
所属	関西学院大学
アブストラクト	
<p>現在（とくに COVID-19 拡大後）の日本人就労者はどれだけ英語を使っているか。この検討のため、2021年3月にウェブ調査会社のモニターを利用して、調査を行った（n = 2159）。本発表では、その分析結果を報告する。なお、ウェブ調査は一般的に大きく歪んでいるため、統計的補正（無作為抽出調査の情報を利用した、傾向スコアによる層化重み付け法）を使用した。結果を要約すると次の通り。（1）1年間で1度以上の英語使用を経験した人は、ほぼすべてのタイプの英語使用でとくに少なく、20%未満。（2）産出技能（話す・書く）による英語使用は数%未満。一方、受容技能およびそれ以外の「非伝統的」な国際コミュニケーション（翻訳ツール、日本語で外国人と意思疎通）は比較的多い。（3）COVID-19 拡大の以前と以後で比較すると、いくつかのタイプの英語使用に小さな変化（増減いずれも）が確認できるが、大きな変化ではない。</p>	

8月8日(日) 第4室 ⑫12:05-12:30

タイトル	The language issues in English medium instruction classroom: University faculty's rationales behind their language use
発表者	柴田美紀
所属	広島大学
アブストラクト	
<p>The aim of the study is to demonstrate that language use in English-medium instruction (EMI) classes is diverse across course instructors from different disciplines. The MEXT has strongly promoted EMI courses at universities with dual purposes: increasing scholarly mobility and improving domestic students' English ability. Although policy makers assume that students should gain English language proficiency along with content knowledge, empirical studies do not fully support incidental language learning. More critically, no explicit policy regarding language learning and use is stated in the EMI policy by the MEXT, which is likely to lead practitioners' idiosyncratic interpretation and implementation of EMI. Although this issue has been problematized, the language use issue in EMI classes is underexplored. To further understand the issue, a small-scale study was conducted with 19 faculty members from an English-taught program (ETP) at a national university in Japan. The online survey with both closed- and open-ended questions was designed to explore their language use when teaching their own courses. The results revealed that 1) faculty members have their own language policy in terms of classroom activities and their own use of Japanese, which are not necessarily justifiable based on previous studies; and 2) science faculty tend to use students' L1 (i.e., Japanese) more frequently than those from other disciplines in order to avoid serious accidents while engaging in laboratory experiments. Finally, it is critical that universities implement a stronger language policy that is consistent with the research. Also, clear guidelines for language use need to be provided while reflecting faculty members' input from different disciplines.</p>	

8月8日(日) 第5室 ⑦9:10-9:35

タイトル	多読におけるフロー体験——大学生を対象にした調査から——
発表者	種村俊介
所属	金城学院大学
アブストラクト	
<p>英語の多読は、学習者が『フロー』(内発的に動機づけられた自己の没入感覚をともなう楽しい体験)を体験できる条件を満たし、多くの学習者が多読中にフローを体験することが示されている(Kirchhoff, 2013)。Grabe (2009)はフロー体験がリーディングに対する動機づけを高め、リーディング行動を促進すると述べており、種村 (2019)では、Kirchhoff (2013)と Grabe (2009)を支持する結果が得られた。本調査では、大学生を対象に多読指導を行い、学生は多読においてフローを体験するか、フロー体験は多読行動と関連があるか、について Kirchhoff (2013)と種村 (2019)とは異なる手法で検証した。さらに、フローを体験しやすい学生は、英語のリーディングに対してどのような心理的傾向を有するかを調査した。その結果、多くの学生がフローを体験し、フロー体験と多読行動には有意な正の関連があることが示された。さらに、英語のリーディングに対し、「快適さ」と「知的価値」を有する学生がより多くフローを体験することが示唆された。</p>	

8月8日(日) 第5室 ⑧9:45-10:10

タイトル	日本人大学生における第二言語と母語の一貫性・結束性判断
発表者	藤田賢
所属	愛知学院大学
アブストラクト	
<p>本研究は、日本人大学生を参加者として、文間の一貫性・結束性を判断する力が、英語と日本語ではどのような関係になっているかについて比較し考察することを目的とした。日本人大学2年生100名を参加者として、藤田 (2019, 2020, 2021)で作成した英語と日本語による一貫性・結束性判断課題を実施し、課題の反応時間と正確さが測定された。その結果、結束性が一貫性を強化するという先行研究の結果を支持するものとなった。また、母語の方が第二言語より、速く、正確に判断することができた。これは、母語での言語処理が自動化しており、認知資源を一貫性判断に使用しやすかったためではないかと推察された。さらに、英日での成績には、中程度の相関があり、一貫性・結束性判断は言語間の共通能力である可能性が示唆された。</p>	

8月8日(日) 第5室 ⑨10:20-10:45

タイトル	高校生の英語学習における協同的なリーディング活動の効果
発表者	サルバシオン有紀, 大場浩正
所属	兵庫教育大学大学院, 上越教育大学
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、高校生の英語学習において、協同学習の理念と手法を導入したリーディング活動により期待される効果を理論的に考察することである。次期高等学校学習指導要領外国語（英語）においては、アウトプットに重点を置いた科目が設定されているが、アウトプット活動が深い学びを実現するためには、効果的なインプット活動を仕掛けることが必要であろう。本研究では、特にインプットとしてのリーディング活動に着目し、Khalifa and Weir (2009)の第二言語リーディングモデルとJohnson, Johnson, and Holubec (2009)の協同学習の基本的な考え方を基盤とする。その上で、英語リーディング学習における協同的なリーディング活動がもたらす学習者の学びを、(1)語彙や構造についての明示的知識の獲得、(2)対話によるテキスト理解時に発生する既有知識の拡張、(3)第二言語読解ストラテジーの獲得、及び(4)グループメンバーとの協同的な活動から生成される自己効力感、の4つの観点から理論的に考察する。</p>	

8月8日(日) 第5室 ⑩10:55-11:20

タイトル	再話が読解に及ぼす効果について：異なる理解レベルと学習者の熟達度に焦点を当てて
発表者	伊東賢
所属	茨城工業高等専門学校
アブストラクト	
<p>再話とは読解した内容について、テキストを見ない状態でその内容を知らない人に語る活動と定義される(卯城他, 2009)。第一言語、第二言語の分野を問わず、再話にはテキスト理解を促進する効果があるとされている(Gambrell et al., 1985; Gambrell et al., 1991; Kai, 2008, 2009, 2011)。しかし、その効果は一様ではなく、学習者の熟達度によって違いがあり(Kai, 2009)、再話文に現れる情報にも学習者の熟達度の違いが現れる(Yeari &amp; Lantin, 2021)。また、Kintschの読解モデルでは、テキストベースレベル、状況モデルレベルという異なる理解のレベルが提唱されているが(Kintsch, 1994, 2013)、いずれの理解レベルにおいて、再話が理解を促進するのかについては、未解明な部分も多い。本研究では、高専一年生を協力者として、英文を読解後に再話を行い、それぞれの理解レベルを測定する理解度テストを実施した。分析の結果、異なる理解レベルと学習者の熟達度、そして再話の効果との関係性について示唆が得られた。</p>	

8月8日(日) 第5室 ⑪11:30-11:55

タイトル	大学入学共通テストにおける推論発問の分析：状況モデルの構築につなげる読解指導
発表者	柳瀬学
所属	園田学園女子大学
アブストラクト	
<p>今年初めて実施された大学入学共通テスト（英語 リーディング）の出題形式（発問の種類）に注目し、全47問の分析を行ったところ、学習指導要領の改訂に伴い、発問形式にいくつかの特徴が見られた。</p> <p>その中でも特に推論発問（田中・田中，2018；卯城，2009；清水，2005；Grabe, 2000）に焦点を当て、その内容や全問題数に占める割合を、これまでの大学入試センター試験や、諸外国での大学入学試験（韓国「大学修学能力試験」，中国「普通高等学校招生全国统一考試」，北米地域「TOEFL」等）と比較、分析した。</p> <p>併せて、読解によって生成される3つの心的表象（van Dijk &amp; Kintsch, 1983）に基づき、実際に受験生が、読解中にどのような推論を行なっている（Graesser et al., 1994）のかを検証し、それらの推論力を育成するに、今後どのようなリーディング指導を行うべきか。高校英語授業における、状況モデルの構築を目指した英文読解指導の在り方を考えた。</p>	

8月8日(日) 第5室 ⑫12:05-12:30

タイトル	異なる Reading-to-Write タスクが日本人英語学習者の読解及びエッセイライティングに与える影響：Discourse Synthesis と Source Use の観点から
発表者	佐藤連理
所属	筑波大学大学院
アブストラクト	
<p>近年、summary writing や argumentative essay writing など、reading と writing を組み合わせた技能統合型タスク（Reading-to-Write タスク）の使用が特にアカデミックな環境において増加している。このようなタスクを用いた研究は母語話者や第二言語学習者を対象に盛んに行われているが、先行研究によって細かいタスクの定義が異なっている。また、学習者の作成したエッセイなどの成果物を分析した研究が多い一方で、学習者の読解中及びライティング中の処理を検証した研究は少ない。そこで、本研究では36名の日本人大学生、大学院生を対象に、先行研究で実施されている Reading-to-Write タスクを4つに分類し、協力者の思考発話プロトコルと作成されたエッセイの双方を Discourse synthesis と Source use の観点から分析、考察した。</p>	

8月8日(日) 第6室 ⑦9:10-9:35

タイトル	Extensive Reading, its Duration and Reading Volume
発表者	Goto Takaaki
所属	Kyushu University of Nursing and Social Welfare
アブストラクト	
<p>The purpose of this study is to focus on learners' reading volume for some duration in extensive reading to reveal whether there are significant differences among three types of readers: novice readers, experienced readers and novice readers with experienced readers. Two research questions are as follows. Is there any difference in reading volume between the same students in the first semester and the second semester? Is there any difference in reading volume between the students who have experienced extensive reading and the students who start extensive reading for the first time? From 2019 to 2020, extensive reading was implemented for university students, 30 students in the first semester and 29 students in the second semester. They brought graded readers from university libraries and read them in the classroom for the first 20 minutes of every 90-minute class. They were also required to read them out of class. Only nine students continued extensive reading until the second semester. As a result, unlike the previous research (Joichi, 2015), there was no significant difference in reading volume between the same students in the two semester (<math>T=17, p&gt; .05</math>). There was also no significant difference in reading volume among three types of students (<math>H(2)=2.73, p= .26</math>). Despite these results, the questionnaire survey revealed that experienced students in the class could facilitate novice students to read more. Future research will be necessary to examine how experienced readers can best contribute to extensive reading class.</p>	

8月8日(日) 第6室 ⑧9:45-10:10

タイトル	大学生の未知語を綴る力と語彙力
発表者	川崎眞理子
所属	新潟経営大学
アブストラクト	
<p>アルファベットも仮名も音を表すという点では同じである。しかし、読み方や綴り方がわからないという学習者は多い。本研究では、このような学習者が未知語を聞いたときにどのように綴る（書き取る）ことができるのかを観察するとともに、語彙力が高い学習者は、適正に綴る力、すなわち綴りの規則をより多く習得しているであろうとの過程を検証した。実験協力者は、実単語と非単語をヘッドフォンで聞いて、PCの画面の指示に従って綴りを機ボード入力した。提示語は一音節語でそれぞれ /ei/、/ai/または/ou/の母音を含む実単語と非単語とし、末尾の文字をヒントとして提示する場合としない場合の各2試行とした。その結果、未知語綴りが適正であった割合は予想より低かったが、その割合と語彙サイズの間には相関関係があった。語彙力が高くなった学習者は、綴りの規則を運用できるようになっているのではないだろうか。</p>	

8月8日(日) 第6室 ⑨10:20-10:45

タイトル	自律的英語学習を促進する TOEIC アプリの活用
発表者	Sato Natsuko
所属	東北工業大学
アブストラクト	
<p>大学1年生対象の一般教育英語で TOEIC 演習を行うクラスにおいて「SANTA TOEIC」(Langoo 社)というアプリによる学習を自習教材として使用した。本アプリは延べ1億問以上の解答データを解析した AI (人工知能) を搭載しており、学習者が TOEIC の練習問題を解くたびに学習者のスコアや理解度、弱点を正確に分析するだけでなく、学習者のレベルにあった AI 講義も受講できる仕様となっている。学生は Web にアクセスしあるいはスマホに入れたアプリを用い、自分の都合がよい時間に好きなだけ学習に取り組んでいた。毎週クラス全体の問題の平均問題解答数と平均の TOEIC 予想スコアをクラス内で共有したことが学習効果を上げた。受講学生の平均 TOEIC 予想スコアは短期間に大幅に伸びた。期末に全員が提出したレポートからは学生が授業外で楽しく TOEIC の学習をし、自律的に学習を進めていたことが伺えた。</p>	

8月8日(日) 第6室 ⑩10:55-11:20

タイトル	英語教育学・認知言語学・脳科学の知見適用による小・中・高・大学英語教材システムの開発と構築
発表者	黒川愛子, 中野研一郎
所属	帝塚山大学, 関西外国語大学
アブストラクト	
<p>小学校「外国語活動」「外国語科」の完全実施及び GIGA スクール構想(文部科学省, 2019)により、小中高英語教育の授業改善と ICT 活用は必須である。本研究の目的は、外国語教育・認知言語学及び脳科学の知見を活かし、外国語学習コンピュータ・プログラムを開発・使用し、学習者の4技能5領域向上と英語学習への動機づけを高め、検証を行うことにある。本システムは、学習者が目標言語の音声情報を聴き、その内容を体の動きとして行い母語の介在なく目標言語を習得する TPR 原理を応用することで開発されており、さらにそこで得られた言語運用能力が AI との対話活動によってメタ言語能力に転化するように図られている。TPR は日本人中高生の4技能向上や小中接続への効果が検証されており、本発表では検定教科書にはない語彙も豊富なインプットの中で学び発話の正確さや流暢性を高める本教材の紹介を中心に、小中学校での活用報告も行う。</p>	

8月8日(日) 第6室 ⑪11:30-11:55

タイトル	eTandem プログラムが英語学習者に及ぼす影響
発表者	小林翔, 中川右也, 茅野潤一郎
所属	大阪教育大学, 三重大学, 新潟県立大学
アブストラクト	
<p>本研究は、eTandem プログラムに参加することで、1) 外国人とのコミュニケーションに対する不安の改善がなされたかどうか、2) 国際的志向性が向上されたかどうか、3) 何に気づいたのかを調査したものである。参加者は、日本人学生 17 名と、米国の州立大学に通う中国人学生 28 名、米国人学生 3 名が 8 回プログラムに参加した。データ収集には、不安と国際的志向性に関する質問紙、事前の意識と事後の感想に関する自由記述式の質問紙を用いた。その結果、外国人とのコミュニケーションに対する不安が軽減され (<math>z = -3.58</math>, 漸近有意確率 <math>p &lt; .01</math>, ES: <math>r = .87</math>)、国際的志向性の向上も見られた (<math>z = -3.62</math>, 漸近有意確率 <math>p &lt; .01</math>, ES: <math>r = .88</math>)。また、自由記述式の質問紙の結果、英語学習を日本と海外の文化の違いや共通点を知る良い機会と捉えており、英語学習への意欲の向上につながっている様子を垣間見ることもできた。</p>	

8月8日(日) 第6室 ⑫12:05-12:30

タイトル	第二言語ワーキングメモリの能力指標としての CELF-Com テスト : Stroop task と Simon task との関連性から
発表者	三木浩平, 門田修平, 長谷尚弥, 氏木道人
所属	近畿大学, 関西学院大学, 関西学院大学, 関西学院大学
アブストラクト	
<p>本研究では、コミュニケーションの際の理解、概念化、産出 (門田, 2015) という多重処理における語彙運用能力の測定を目指して開発を進めてきた CELF-Com テスト (Kadota, Shiki, &amp; Hase, 2015) が、空間課題のサイモン (Simon) や言語課題のストロープ (Stroop) といった心理テストとどう関係するかについて検証するため、これらの 3 つのテストを外国語として英語を学ぶ日本語を母語とする大学生 44 名を対象として実施した。データ分析の結果、CELF-Com テストと、空間課題のサイモン (Simon)、言語課題のストロープ (Stroop) それぞれとの間に一定の関連性が認められた。したがって、CELF-Com テストは「音韻的ワーキングメモリ」とともに、それを制御する「実行系ワーキングメモリ」の能力測定のための妥当な指標を提供してくれる可能性を持っていることが明らかとなった。</p>	

8月8日(日) 第7室 ⑦9:10-9:35

タイトル	筆記ランゲージングを取り入れた教室実践の試み
発表者	石川正子, 鈴木渉
所属	城西大学, 宮城教育大学
アブストラクト	
<p>筆記ランゲージングとは外国語学習者が疑問や問題に感じたことを書いて理解を深めるプロセスで、学習を促進することが明らかになりつつある。しかし、筆記ランゲージングを授業に取り入れた実践的な研究はほとんど見られない。そこで、10週間にわたり授業にランゲージングを取り入れる実践を行った。25名の大学生を2群に分け、授業初めにその日学習する文法項目の事前テストを行い、通常の授業を実施した上で、その日学んだことについて毎週交互にランゲージング又は英文和訳を行った。毎授業最後に事後テストを実施した。主な結果として、全ての週で事前事後テスト間に伸びがあったが、ランゲージングを行った週と行わない週の伸長度にはほとんど違いは見られなかった。また、ランゲージングを行った週の間でもそれぞれの週の伸びに差が見られた。これらの結果について理論や研究に基づいて議論し、教育的示唆を述べる。</p>	

8月8日(日) 第7室 ⑧9:45-10:10

タイトル	通訳教育が英語学習に与える影響について —英語を外国語として学ぶ日本人大学生を対象とした事例研究—
発表者	下吉真衣
所属	関西外国語大学
アブストラクト	
<p>本研究では、第二言語習得研究の観点から複数の通訳訓練法を取り入れた統合的指導法の利点を明らかにし、その統合的指導法の実践が L2 運用能力の向上に貢献するのかを、一人の日本人大学生に焦点を当てた事例研究のデータを基に考察を行った。通訳訓練法の多くは既成の内容を口頭や筆記で再生することにより学習者の「気づき」を促し、言語形式に意識を向けさせる効果がある。さらに、L2 から L1 への変換作業が伴う通訳は意味内容を検討する機会を与える。従って、通訳訓練は言語形式に関する知識を深め、言語形式と意味の結びつきを強化するのに役立つと考えられる。今回の事例研究の中で行った統合的指導法では4種類の通訳訓練法を選択し、翻訳と通訳の活動も取り入れた。結果として、統合的指導法はインプット理解の正確性を高めるのに効果的であるが、アウトプットの力を伸ばすためには通訳訓練の他に何らかの指導を追加する必要があることが明らかとなった。</p>	

8月8日(日) 第7室 ⑨10:20-10:45

タイトル	ALACT モデルを用いた若手英語教師の自律的な授業改善に関する研究
発表者	岡崎浩幸
所属	富山大学
アブストラクト	
<p>本研究の目的は3名の若手英語教師(中学1名、高校2名)がコルトハーヘンの提唱するALACTモデルに用いられる「8つの窓(問い)」(2010)を用いて授業改善を自律的に行うことができるのかを検証することである。若手教師の授業後、著者は8つの中から答えやすそうな問いを発し、若手教師の省察を促す。教師は問いに答えながら、授業者と生徒との思いのズレや授業の活動、展開に関する課題に気づく。次回の授業で取り組んでみたい代案や解決案が浮かんできたところで省察を終了する。後日の授業を録画し、授業がどのように改善されたのか代案等が有効だったのか、生徒にどのような変化があったのかを検討した。結果、授業者が生徒の思いや要望に基づいて振り返った部分が後日の授業改善に生かされる傾向が見られた。</p>	

8月8日(日) 第7室 ⑩10:55-11:20

タイトル	Putting CEFR educational principles into practice through Action Research - The CARM Model.
発表者	Birch Gregory, 永井典子, Maria Gabriela Schmidt
所属	清泉女学院大学, 茨城大学, 日本大学
アブストラクト	
<p>This presentation reports on a Japan Society for the Promotion of Science (JSPS / Kaken) sponsored project on the CEFR and Action Research (AR). The project aims to facilitate numerous small-scale action research projects related to foreign language teaching in Japan. Practitioners who were invited to participate in the project are reflecting on and finding ways to improve their teaching practice using the CEFR as a reference and conceptual tool, and are being provided with support and guidance to ensure that their research is conducted systematically in relation to the AR literature and reflective of CEFR principles. The project proposes a CEFR-focused AR model (CARM) based on a critical review of AR literature. The presentation will start with an introduction to the current Kaken project, followed by a brief overview of action research, including an introduction to various AR models, ranging from the traditional to the more recent. A model for AR that defines the research focus in relation to the CEFR will then be proposed. The presentation will conclude with a discussion of how the viability of this model will be examined over the final two years of the Kaken research project.</p>	

8月8日(日) 第7室 ⑩11:30-11:55

タイトル	中学校における、英語の探究型学習（探究的な学習）に関する調査研究
発表者	金子淳, 山口常夫, ジェリー・ミラー, 三枝和彦
所属	三重大学, 東北文教大学, 山形大学, 山形大学
アブストラクト	
<p>探究型学習（探究的な学習）の実施状況は、山形県では全国平均並みか、校種によっては下回っている（文部科学省「平成30年度全国学力・学習状況調査」）。また、英語に関するそれは非常に少ない（ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査 [2016年]」）。原因を明らかにするため、山形県教育委員会・市町村教育委員会と連携し、県内公立中学校すべてを対象に調査を行った。回収データ69件に単純集計・クロス集計（フィッシャーの正確確率検定を施した）を行い、自由記述はテキストマイニング（階層的クラスター分析・多重対応分析等）を行なった。結果、モデルとなる授業例が少ないこと、教員の多くが文法中心の指導法・言語観を持っていることがわかった。使いながら言語を習得していくSLAの言語観で指導する教師が増えていくことが重要である。この研究は「やまがた教育振興財団・令和元年度教員養成に関する調査研究事業」の研究助成を受けて実施した。</p>	

8月8日(日) 第7室 ⑫12:05-12:30

タイトル	教師の変容を促す協働的でリフレクティブな教員研修プログラムに関する研究：日本の高等学校英語科における事例
発表者	阿部雅也
所属	新潟経営大学
アブストラクト	
<p>本研究では、新潟県高等学校教育研究会で行なっている英語教師向けの体験的・協働的な研修の効果に焦点をあて、校外（Off-JT）における学びが、校内（OJT）の同僚性に与える影響を明らかにする。研修に参加する熟達教師2名とその勤務校で学年を共に担当するチームの教員2名、および採用後数年の若手教師を研究協力者とし、研修後の現場における学びの活用とチームでの協働性の構築について半構造化インタビューを行い、グラウンデッド・セオリー（Hadley, 2017）の手順に従って分析した。その結果、熟達教師だけに特徴的に見られた、以下の3つのカテゴリーと9つの働きかけが抽出された。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>①不協和音の克服とチーム内教員への働きかけ</li><li>②生徒を起点にしたパフォーマンス評価の目標設定と共有</li><li>③「共創」による対等な関係のチーム作り</li></ol> <p>今回の結果から、視点変容や他者への働きかけを促すなど、校内実践の変容につながる今後の教員研修のあり方に関する示唆について検討する。</p>	

8月8日(日) 第8室 ⑦9:10-9:35

タイトル	英語教員養成における授業研究のためのワークシート作成の試み
発表者	馬場千秋
所属	帝京科学大学
アブストラクト	
<p>英語科教育法の授業において、模擬授業は、学生自身が教材研究をどう行うか、教科書を用いてどう教えるのかということを考え、実践に結びつける重要な役割を果たしている。この経験を通して、学生が自らの指導技術をしっかり身に付け、磨くことになるが、その際、英語科教育法担当教員からのコメントだけでなく、生徒役となる他の受講者からのコメントも不可欠となる。そのため、担当教員、生徒役となる学生ともに、同一の観点から模擬授業を評価し、コメントをすれば、各学生の模擬授業における改善点がより浮き彫りになる。本発表では、神保他(2014)、望月・小菅(2017)の枠組みをもとにして作成した、学生向けの授業研究のためのワークシートを学生が模擬授業時に記入し、学生同士のフィードバックに用いた結果、どのように模擬授業が改善されたのかを報告する。またワークシートに設定した項目が妥当なものかを検討する。</p>	

8月8日(日) 第8室 ⑧9:45-10:10

タイトル	Do ELT textbooks provide the opportunities to practice pragmatic knowledge?
発表者	川島千枝
所属	栃木県立栃木工業高等学校
アブストラクト	
<p>To develop learners' pragmatic competence in the target language is one of the most important goals of foreign language education. The importance of practicing the pragmatic knowledge provided in ELT textbooks has been emphasised and the lack of tasks to support such practice has been pointed out (McGroarty &amp; Taguchi, 2005; Shimizu et al., 2007, 2008). Using textbooks may be only a way to provide novice level EFL learners with opportunities to practice the language use they have learned in the textbooks. They may feel comfortable in practicing with the use of textbooks in the classroom environment. This study explores five beginner level internationally used commercial ELT textbooks and seven EFL textbooks used in Japanese senior high schools as to presentation of practice tasks which include speech acts. The outcomes of the study reveal 1) particular types of speech acts which can be commonly practiced in the textbooks; 2) how communicatively these speech acts are treated in the tasks; 3) the differences between these two types of ELT textbooks regarding inclusion of tasks to practice speech acts. At the same time, the strength and weakness of the tasks provided in each set of textbooks is discussed in terms of developing learners' pragmatic competence. In the end, some practical suggestions are made as to how teachers might supplement these materials to adapt them for pragmatic instruction.</p>	

8月8日(日) 第8室 ⑨10:20-10:45

タイトル	新課程用「英語コミュニケーションⅠ」の教科書は高校生にどう受け止められるか？ ～各レッスンのトピックに注目して～
発表者	本田亮
所属	神奈川県立上溝高等学校
アブストラクト	
<p>高校の英語学習における教科書の役割は大きい。これまで、高校英語の教科書は生徒にとって難しすぎるのではないかと指摘されてきた(大田,2017; 根岸,2015 など)。また生徒自身が感じる教科書本文の難易度に影響を与える因子として、新出語彙の難しさとトピック(話題)の難しさが挙げられ、特に授業を想定した条件下ではトピックの難しさの方が強い因子であることがわかっている(Honda, 2017)。</p> <p>そこで、本研究では来年4月から使用される「英語コミュニケーションⅠ」の教科書のうち、中堅校向けの10社11冊を以下の2つの観点から分析する：①その全体的な特徴およびトピックの特徴や傾向はどのようなものか。②実際に高校生が学びたい、読んでみたいと考えるトピックは何か。その回答にはどのような傾向があるか。</p> <p>さらに現行課程で3年間学び今年3月に卒業した生徒のアンケート結果も踏まえ、今後の教科書作成に向けた提案をする。</p>	

8月8日(日) 第8室 ⑩10:55-11:20

タイトル	LOTS と HOTS の視点から考える高等学校教科書を活用した言語活動の提案
発表者	杉浦理恵, 今井典子, アシュクロフト ロバート ジョン, ディーン エリック, ハミルトン マーク
所属	東海大学, 高知大学, 東海大学, 東海大学, 東海大学
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、日本の高等学校英語科教科書で学んだ言語知識を、効果的にアウトプットにつなげるための言語活動を提案することである。先行研究では、豊富なインプットとアウトプットを得る機会や、メッセージの授受を重視した課題解決型の言語活動が言語習得を促進するという報告がある(Ellis, 2003)。本研究では、特に、Bloom (1956) をもとに Anderson ほか (2001) が提案した認知プロセスを理論的枠組みとし、生徒が低次の思考 (lower-order thinking skills : LOTS) から、段階的に高次の思考 (higher-order thinking skills : HOTS) を使用できるように言語活動を作成し、実際に高校の授業で使用した。その授業結果から明らかになったことを基に、より深い高次の思考を導くために必要な言語活動と、その実施において留意したい点を提案する。</p>	

8月8日(日) 第8室 ⑩11:30-11:55

タイトル	効果的・効率的・魅力的な研修にするための研修設計 —インストラクショナルデザインを活用した研修改善の試み—
発表者	ブリティッシュ・カウンシル
所属	賛助会員
アブストラクト	
<p>授業改善のための研修は、研修後の教師の意欲や自信、そして授業が変わることを目指すが、現実には様々な課題がある。そのため、効果や再現性が高い研修要素が特定できると、教員の資質向上に有益である。今回、「インストラクショナルデザイン (ID、教育設計)」の視点から、当機関の研修の有効性と課題を分析した。IDは授業や研修を含め、すべての教育活動において、効果や効率、魅力を高める手法で、教育活動の終了時に「現場で実践できていること」を重視し、オンライン学習が増える中注目が高まっている。分析の結果、IDの理論やモデルを根拠として、「自信を高める(やればできそうだ)」や「例示がある: tell me ではなく show me」などの要素が有効であると判明した。また、改善点をIDに沿って特定し、2019年度に2教育委員会の研修で実践した。研修構成、受講者の自律性の向上等において工夫を行った結果、顕著な成果が認められた。その成果を紹介し、更なる充実に向けた策を考察する。</p>	

8月8日(日) 第8室 ⑫12:05-12:30

タイトル	音読アプリ Qulmee の開発 —自発的に音読ができる学習者の育成を目指して
発表者	イースト株式会社
所属	賛助会員
アブストラクト	
<p>音読は英語学習にとって非常に重要な手法であるが、家庭学習で音読を課してもそれを教師が聞き、アドバイスし、改善していくための時間を授業中にとるのは時間的に困難である。イースト株式会社は自宅や学校内で生徒がスマートフォンやタブレットを使い音読を行い、それを教師に提出して瞬時に評価することが可能な Qulmee という音読アプリを開発しました。英語テキストの本文を瞬時に自然な音声とポーズつき音声にすることができ、評価はいくつかの観点での5段階評価と音声コメントが可能である。本発表においては本アプリの機能紹介と目指しているもの、現場からの意見を踏まえて現在までに改善してきたこと、今後どのように改善していくか、そして学校現場でどのようにこのアプリが使用されているかを報告する。</p>	

8月8日(日) 第9室 ⑦9:10-9:35

タイトル	肯定側(または否定側)に不利な英語ディベートの論題はあるのか: 上級者向け即興型英語ディベート大会の結果から
発表者	小林良裕
所属	東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
アブストラクト	
<p>即興型英語ディベートの大会において、肯定側と否定側、一方にとってある種の論題は有利ではないか、という疑問が口にされることがある。初心者から中級者を対象とした大会結果を用いた先行研究を踏まえ、上級者を対象とした大会の勝敗結果を用いて、以下の問いについて数量的に検証した。①政策論題において、否定側の方が、勝ちやすいのではないか。②肯定側・否定側が有利か否かは、論題固有の性質によるのか。③勝敗に偏りがある論題にはどのような特徴があるか。検証で用いたデータは、4年間分の即興型英語ディベート全国大会の予選結果であり、それぞれの論題ごとに約20試合が行われた。結果として、否定側が統計的に有意に勝っている論題が存在することが確認され、またその特徴として、以下の3点が明らかになった: ①常識的に抵抗感があると感じられ得る政策案を肯定する必要がある、②肯定側が論題を具体的なケース・モデルにする責任が大きい、③試合を成立させるために、具体的に何についての話なのか肯定側が説明する責任が大きい。</p>	

8月8日(日) 第9室 ⑧9:45-10:10

タイトル	The Effect of Lessons Using YouTube on Motivation, English Learning, and Listening Ability of Junior High School Students
発表者	金本英朗, 岡崎浩幸, 石津憲一郎
所属	高岡市立志貴野中学校, 富山大学, 富山大学
アブストラクト	
<p>This study aims to examine the effect of lessons using YouTube videos as authentic materials on motivation, English learning, and listening ability of junior high school students in Japan. One-hundred-four second grade students at a junior high school in Japan participated in lessons using YouTube videos. Six episodes selected from six genres of YouTube videos were viewed in six classes over six weeks by an intervention group with group comprehension activities and pre- and post-viewing activities in pairs. In the meantime, a waiting-list group studied English with only non-authentic materials, primarily textbooks, during the first six weeks and viewed YouTube videos during the latter four weeks of the post- to follow-up period. Pre-, post-, and follow-up questionnaires were conducted to investigate the influence of lessons utilizing YouTube videos on students' motivation and English learning. Additionally, listening tests were administered to examine the lessons' effect on listening skill. The results analyzed by a Linear Mixed Effect Model revealed significant improvements in the EFL students' learning motivation and English learning outside the classroom, using either non-authentic materials or authentic materials. In the end, the results did not demonstrate a significant difference in listening ability improvement between the two groups. It might be that the length of the study was too short to discover a difference, so it would be useful to study the long-term effect on listening ability in future research.</p>	

8月8日(日) 第9室 ⑨10:20-10:45

タイトル	英語論文要旨に見る Metadiscourse Marker
発表者	石川有香
所属	名古屋工業大学
アブストラクト	
<p>修士論文の提出時においても、英語要旨を求められることが増えている。工学系大学では、院生への英語要旨のライティング教材の開発が強く求めるようになってきている。本研究では、評価の高い英語専門誌に掲載された要旨と大学院生の要旨を Metadiscourse Marker の使用の観点から比較し、大学院生の言語特徴を明らかにすることで、効果的な教材の開発を目指す。先行研究では、学生の英文要旨では Metadiscourse Marker が過剰使用される傾向があるとされている。本研究で、それぞれ 200 本ずつの英文要旨を調査分析したところ、特に、label stage や announce goal などの Frame marker が過剰使用されていることが分かった。とりわけ、in this paper/in this study や on the other hand などの特定の表現が広範にわたって、使用される傾向が見られた。また、self-mention の使用についても大きな違いが見られることが分かった。</p>	

8月8日(日) 第9室 ⑩10:55-11:20

タイトル	2020 年度小学校外国語教科書分析 — Small Talk にどう活用したらよいか—
発表者	中野聡
所属	北陸学院大学
アブストラクト	
<p>2020 年度から小学校 5, 6 年生が使用している 7 種類の教科書の Small Talk の取り扱いについて分析した。その結果、①多くの教科書が「意味あるやり取り」を意識した Small Talk を取り扱っているが、それらが量的・質的に十分とは言えないこと ②どのような話題で Small Talk を行うかが重要であり、そのためには指導者による学習内容分析、児童の興味関心に関する実態把握、話題の整理方法が大切であること ③「意味のあるやり取り」を行うために、「必然性」をどのようにして児童に感じさせるかについては、指導者の工夫によるところが大きいことが明らかとなった。これらのことから、教科書活用の際に配慮すべき事柄について言及したい。</p>	

8月8日(日) 第9室 ⑪11:30-11:55

タイトル	大学教養教育英語科目における Extensive Reading の有効性—自己調整学習の観点から—
発表者	立田夏子
所属	弘前大学
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、大学教養教育英語科目における英語多読 (Extensive Reading) の有効性を自己調整学習の観点から検証することである。大学教養英語中級レベルの3クラスに、大学附属図書館と連携して、1年間(前期 Reading と後期 Speaking) 継続的に Extensive Reading を授業内・外活動に取り入れた。授業外活動では、好きな本を読んでその内容や意見をワーク・シートにまとめ、また、一番気に入った本の POP を1つ作成して図書館主催の POP コンテストに応募した。授業内活動では、そのワーク・シートを活用してグループ活動を行なった。学期末のリフレクション活動の結果を分析したところ、Extensive Reading を前期の授業内・外活動に取り入れることで学生の英語学習へのモチベーションが向上し、さらに後期でも授業内・外活動に取り入れることで、継続的に学生の英語の自己調整学習が促進する可能性があることが明らかになった。また、授業と図書館との連携によって教育効果が向上する可能性も示された。</p>	

8月8日(日) 第9室 ⑫12:05-12:30

タイトル	語彙的に簡単で短い英語詩は学習者にどう読まれるか：読解の難しさを中心とした考察
発表者	西原貴之
所属	広島大学
アブストラクト	
<p>英語詩は教材として敬遠される傾向にあるが、語彙的に簡単で短い作品に関しては様々な学習効果が期待されている。実際に多くの英語詩指導モデルが提案されてきたが、これらのモデルでは、学習者はテキストを読みこなすことが前提とされており、かつ学習者の実際の英語詩読解プロセスの特徴が、つまづきも含めて反映されていない。本発表では、これらのテキストの実際の読解プロセスの特徴を探るために、異なる種類の英語詩を中～上級大学生及び大学院生英語学習者に読んでもらい、文字通りの意味を理解する課題と作者の意図を考える課題を行ってもらった。その結果、(1) 語彙を知っても逸脱的表現の処理には困難を要すること、(2) 文字通りの意味は簡単に理解できても作品解釈に困難を感じる事、(3) 作品解釈が難しいと感じるテキストは個人差が大きいこと、などが示された。以上の結果をもとに、英語詩指導モデルを構築する際の留意点についても提言を行う。</p>	

8月8日(日) 第10室 ⑦9:10-9:35

タイトル	言語形式と親密度が Lexical Bundles の処理に与える影響
発表者	岡野紗綾加
所属	筑波大学大学院
アブストラクト	
<p>定型表現の一種である Lexical Bundle (LB) は受容と発信などの言語処理を流暢にする。LB が1つのまとまりとして処理されることを全体的処理仮説と呼ばれ、年齢や使用言語に関わらず仮説を支持する結果が先行研究から得られている。しかしながら、多くの先行研究はLBの後に後続後が必要か(例. are likely to) , 必要でないか(例. as a result) など、その言語形式の完全性について考慮していない。さらに、LBに対する親密度(よく見聞きすると感じているかという程度)が全体的処理に与える影響についても検証されていない。以上のような限界点を踏まえ、本研究ではフレーズ判断課題を用いて、日本語英語学習者がLBを1つのまとまりとして処理しているかどうかについて検証した。調査結果から、連語指導や教材開発に対する示唆について議論する。</p>	

8月8日(日) 第10室 ⑧9:45-10:10

タイトル	注釈による句動詞の付随的語彙学習：関与負荷仮説に基づいて
発表者	小室竜也
所属	筑波大学大学院
アブストラクト	
<p>テキストに付与されている注釈は、特定の語に対して学習者の注意を向ける機能があり、付随的語彙学習の効率を高めることができる。注釈を用いた先行研究では主に単語の学習のみに焦点が当てられ、その効果は連語の学習にも適用可能かは未解明である。そこで本研究は、①意味が1つだけ提示される単一式注釈と②文脈に最も合う意味を選択肢の中から選ぶ多肢選択式注釈を用いて、句動詞と単語の学習を比較した。調査では日本人大学生43名が2種類の注釈の付いたテキストを読解し、再生・再認テストに取り組んだ。分析の結果、①単一式よりも多肢選択式注釈の方が効果的であること、②学習目標語の種類で学習に差は見られないことが明らかになった。この結果は関与負荷仮説(Laufer &amp; Hulstijn, 2001) が句動詞の学習にも適用可能であることを示している。本発表では、上記結果から得られた語彙指導への教育的示唆についても議論する。</p>	

8月8日(日) 第100室 ⑨10:20-10:45

タイトル	単語の印象はスペリングテストのパフォーマンスに影響を与えるか
発表者	高波幸代
所属	中央大学人文科学研究所
アブストラクト	
<p>本研究の目的は、単語の印象がスペリングテスト（書き取り・多肢選択式）のパフォーマンスに影響を与えるのかを検証することである。Nation and Webb（2001）の示す語彙の難しさに影響を与える要因のうち、発音のしやすさ、なじみ度合い、イメージしやすさ、は学習者の反応と関わるものである。加えて、文字の長さの印象もテスト結果を左右する可能性がある。調査では既習語 35 語に対する印象をそれぞれ「はい・いいえ」で回答させた。参加者は日本人大学生 78 名（英語専攻・非英語専攻）であり、語彙サイズテストの結果から、上位（4000 語以上）、下位（4000 語未満）に分けられた。分析の結果、上位、下位ともに文字の長さが 9 字以上になると「長い」と感じていたが、正答率との関係は明らかではなかった。一方、上位、下位ともに「発音しやすい」と感じる割合が 50%未満であった単語は、書き取りテストの正答率も低い傾向にあった。当日はより詳細な分析結果を報告する。</p>	

8月8日(日) 第10室 ⑩10:55-11:20

タイトル	毎回の授業で語彙に関する課題を課した場合の語彙力の変化
発表者	古樋直己
所属	大阪工業大学
アブストラクト	
<p>語彙力は英語運用能力の基礎で、英語学習で重視すべき主要な項目の一つに違いない。本発表は、コロナ禍で授業の相当部分がオンライン形式となった半期の授業期間中に語彙に関する課題を毎回課すことで、語彙力がどの程度向上するかを調査した事例報告である。全 14 回の授業中、語彙に関する課題提出結果を成績に反映させることで語彙学習の動機づけを試み、語彙力向上を目指した。対象は理系学部の 2、3 回生で、Vocabulary Levels Test (Nation, 2001) の 2000 語、3000 語の各レベルの点数を初回の授業と、最終回で比較する。参考までに対象学生の TOEIC 平均点は 330 点程度である。語彙テストは主に TOEIC 対策用の語彙集から出題した。語彙集の学習には授業者による語彙集解説動画の視聴するよう指導した。学習が進行中のため、結果は発表当日に明らかにする。</p>	

8月8日(日) 第10室 ⑩11:30-11:55

タイトル	英語心内辞書における名詞の結びつき—再構築・変容、精緻化—
発表者	折田充, 村里泰昭, 小林景, 神本忠光, 相澤一美, 吉井誠, Richard Lavin
所属	熊本大学, 熊本大学, 慶應義塾大学, 熊本学園大学, 東京電機大学, 熊本県立大学, 熊本県立大学
アブストラクト	
<p>第二言語話者の心内辞書 (ML) の発達・変容は時間を要する。本研究は ML 内の名詞の結びつきに焦点を当て、短期間の集中トレーニングによって「ML 構造は再構築・変容するのか」「語彙項目 (名詞) 間の結びつきは精緻化 (=細部まで緊密に構造化) するのか」について、語彙学習プログラム Word Cluster Master Program (WCMP) を用いて明らかにすることを目的とした。WCMP は、コア語、およびコア語と意味の上で結びつき度が高い 5 つのクラスター語を 1 セットとする「学習クラスター」の習得を目指す。WCMP 名詞 6 ユニット版による、6 週間の実証研究を行った結果、実験群では、WCMP 取り組み前と取り組み後の ML 構造に統計的有意差が検出され、再構築・変容が確認された。対照群では、有意差は検出されなかった。両群の語彙項目間の結びつきの精緻化についても同様の結果となった。</p>	

8月8日(日) 第11室 ⑦9:10-9:35

タイトル	テスト・フィードバックの実証的研究：メタ認知，言語知識，動機の観点から
発表者	板垣信哉, Leis Adrian (リース・エイドリアン)
所属	尚絅学院大学, 宮城教育大学
アブストラクト	
<p>英語の授業では多様な目的のもとに，定期テスト，小テスト，などの多様なテストが行われている。問題はテストの際に，どういったフィードバックを与えることが，学習面及び動機面で効果的であるかである。本研究では，この課題をメタ認知理論，言語知識（意味基盤か文法基盤か），及び動機理論の観点から，実証的に研究することを目的としている。実験では，高校生3グループ（計118名）の参加者が同じ語彙・文法問題（英検3級・準2級の10問）を解いた後に，グループ毎に「○×条件」「意味条件」「文法条件」の3通りのフィードバック与えた。その後，参加者に「メタ認知的納得（7段階）として，フィードバックがどの程度納得できたか」と「メタ認知的自信（7段階）として，次回，同じようなテストを受けた場合，今回より点数が上がる自信がどの程度であるか」を回答させた。これらの結果をメタ認知理論，言語知識，動機の観点から考察し，指導の示唆を議論する。</p>	

8月8日(日) 第11室 ⑧9:45-10:10

タイトル	21世紀における外国語教育の多様性への寛容度一個別最適解と納得解は外国語教育にあり得るのかー
発表者	藤居真路
所属	広島県立尾道商業高等学校
アブストラクト	
<p>高校には，中1初期に躓いた生徒と比較的英語が得意な生徒が混在しているクラスがある。そうしたクラスでは，活用と探究的要素を加えた活動を用いて，ペアやグループで楽しみながら，Personalized Learningの要素も含んだ学びになるように工夫している(Reigeluth &amp; Karnopp, 2020)。他方，工業社会から情報社会の変化を経験し，AI社会への歩みを始めている中で，キー・コンピテンシーの育成を目指して学びをデザインしている(Reigeluth, 1999)。実践例を挙げながら，Inclusive learningの考え方を念頭におき(Brown, 2016)，AI化が進んだ社会に向けて資質・能力を育成し，英語力の伸長を図る学びの在り方を考えたい。また，英語教育における個別最適解と納得解を求めたファシリテーションとスキャフォールディングの在り方についても考えたい。</p>	

8月8日(日) 第11室 ⑨10:20-10:45

タイトル	Global Issues in Action
発表者	Yanagawa Kozo
所属	法政大学
アブストラクト	
<p>英語を使いながら内容と言語の両方を同時に教えるのは、普通の日本人英語教師にとってハードルが高い。そこで、国際問題を題材に、あまり準備に時間をかけなくても学生(生徒)の満足度をそこそこ得られる授業づくりをみなさんと共有・議論したい。</p>	

8月8日(日) 第11室 ⑩10:55-11:20

タイトル	TED Talks 使用の遠隔授業で教員の説明と Writing の量が大学生の英語力に与える効果
発表者	長谷川修治
所属	植草学園大学
アブストラクト	
<p>2020年4月から大学1年生を対象に、前期「英語Ⅰ」と後期「英語Ⅱ」を、Google Classroom による TED Talks を使用した遠隔授業で実施することになった。本研究の目的は、「英語Ⅰ」から「英語Ⅱ」で変更点となった、教員の説明と Writing の量が大学生の英語力に与える効果を検証することであった。参加者は同じ学部で異なる各24名の学生である。両授業では、宿題として難易度がほぼ同じ TED Talks を毎回1話ずつ英語で視聴し、授業で Google Forms による英語の「確認テスト」を実施した。その際、「英語Ⅱ」では誤答率の高い問題に対して Meet で説明を行い、Writing の量も5行程度であったのを10行程度に増やした。それぞれ TED Talks 10話10回の授業を実施して、その事前・事後を授業とは無関係の英語テストで比較した結果、「英語Ⅱ」では成績が向上し有意な差となった。</p>	